

専修大学社会科学研究所月報

The Monthly Bulletin of the Institute for Social Science
Senshu University

ISSN0286-312X

No. 660

2018. 6. 20

調査報告

復興ステークホルダーの探索的再構築に関する研究実践

——被災地・石巻での聞き取り調査から——

所澤新一郎・佐藤慶一・大矢根淳

目 次

1. はじめに	1
2. 石巻復興きずな新聞舎・岩元暁子さん	2
3. 一般社団法人サードステージ代表理事杉浦達也さん、理事新井英児さん	9
4. 一般社団法人はまのね 代表理事 亀山貴一さん	17
5. おわりに	26
5-1. 3団体インタビューの知見・論点	26
5-2. 首都直下地震後の復興まちづくりへの示唆	28
編集後記	33

調査報告

復興ステークホルダーの探索的再構築に関する研究実践

——被災地・石巻での聞き取り調査から——

所澤新一郎・佐藤慶一・大矢根淳

1. はじめに

東日本大震災(2011.3.11=2010年度末に発災)は今年 2018 年度で 9 年度目、そしてそろそろ 10 年度目の節目に向けて総括検証が始まる。被災現場では、法定年限目安の 2 年を大きくこえて未だに仮設住宅生活を送っている被災者も多い。そうした各現場には現実的に、実に多様な多くの方々(ステークホルダー)が、「復興」各次元・局面に参画し尽力しているのであるが、一般的には主に復興公共土木事業竣工(防潮堤や高台移転地の造成)を「復興」と見なす一義的思潮が我が国には存在していて、そうしたクリティカルな各現場に真摯に関わっている方々の姿が見過ごされているのもまた事実である。

そこで、「復興」とはいかなる事象・取り組みを意味するのか、その原義に立ち返り・原義を再吟味しながら、復興事象の多層性・多義性を把握¹したところで、その各層・各々の現場に対峙する様々な人々の取り組みのありかたを渉猟して再評価していくことを目的として、現地聞き取り調査²を企画・実施した。本稿では、その聞き取り調査データの一部を紹介する。

このたびの現地調査は以下の体制で実施された。

現地調査名称：復興ステークホルダーの探索とその聞き取り調査

調査実施日時：2018 年 1 月 20 日～21 日

調査対象者：石巻復興きずな新聞 編集長 岩元暁子氏

一般社団法人サードステージ 代表理事 杉浦達也氏／理事 新井英児氏

一般社団法人はまのね 代表理事 亀山貴一氏

調査メンバー：飯考行(研究代表、社研所員)／佐藤慶一(同所員)、

所澤新一郎(同客員研究員)、三澤一孔(同客員研究員)、宮定章(同客員研究員)、

以上、2017 年度社研グループ研究助成 B(飯グループ)メンバー

大矢根淳(同所員・オブザーバー参加)

¹ 「復興」を学際的・実践的に検討するために日本災害復興学会が創設され(2007 年度)、学会創設当初から「復興とは何かを考える委員会」が設置されて、「復興」概念の検討が重ねられてきた。その後、学会創設 10 周年企画として今年度再び、「復興とは何かを考える連続ワークショップ」が企画・実施されているところである。本稿ではそうした「復興」概念検討の経緯をもとにしている。

² 専修大学社会科学研究所・2017 年度グループ研究助成 B「復興ステークホルダーの探索的再構築に関する研究実践」(代表：飯考行法学部教授)において、石巻復興ステークホルダー探索のフィールドワーク、聞き取り調査が 2018 年 1 月 20-21 日、実施された。助成に深く感謝いたします。

調査方法：所澤が対象者にアポイントメントをとり、調査メンバー全員で指定された施設に赴き、インタビュー形式で1～2時間ほど、お話をうかがった。質問項目等はあらかじめお知らせしておき、インタビューの流れに沿って適宜、詳細質問項目を加えていった。会話をICレコーダーで録音して、後日、テープおこし原稿を作成した。原稿については対象者にチェックいただいた上で、本稿への掲載許可をいただいた。

本稿は、2018年1月に宮城県石巻市で2017年度社研G研B(飯グループ)メンバーが中心になって行なった3団体のインタビュー記録をまとめ、若干の考察を加えるものである。

(以上、大矢根淳)

2011年3月11日の東日本大震災で石巻市は津波によって大きな被害を受けた。丸7年が経過した今も仮設住宅で暮らす人は多く、まだ再建の途上にある。悲しみや混乱が残る中で、地域のため、自身のためにさまざまな活動に懸命に取り組む人も少なくない。この7年間、走り続けてきた今回の3団体の方々からは、地域社会の課題に対し、それぞれの手法で真摯に取り組んできたことが分かる。情報が入らず支援の網から置き去りになりがちな社会的弱者、過疎高齢化が進む集落の在り方、外部から人を呼び込む持続可能な地域に向けた模索…。災害復興の概念を超えて、日本の社会全体で共有すべき貴重な足跡をたどってみたい。

(以上、所澤新一郎)

2. 石巻復興きずな新聞舎・岩元暁子さん

東日本大震災の支援活動を石巻市で続ける「ピースボート災害ボランティアセンター」(以下、PBV)は、2011年10月から市内の仮設住宅向けに無料情報紙『仮設きずな新聞』の発行、配布を続けてきた。「仮設暮らしに役立つ情報を発信する新聞」、「ココロが元気になる新聞」がコンセプトで、最大7,500部を発行。2016年3月、震災5年の節目でPBVが石巻での活動を終えるのを機に、新聞も113号で終刊となった。

PBVの職員で、きずな新聞の編集長だった岩元暁子さんは1カ月後、独立して仲間と「石巻復興きずな新聞舎」を設立し、6月に後継紙『石巻復興きずな新聞』を創刊した。「最後のひとりが仮設住宅を出るまで」を目標に、仮設住宅すべてと市街地の復興公営住宅(災害公営住宅)を対象に無料配布を続ける。

2017年1月21日(土)、午前9:00、石巻復興きずな新聞舎にて、お話をうかがった。



写真1：インタビューにこたえる岩元暁子さん



写真2：『石巻復興きずな新聞』創刊号

—発行を続けるきっかけは。

私は震災が起きた翌月、石巻に一ボランティアとしてやってきました。3年ほど前に結婚した夫が東京に住んでいて、どこかのタイミングで東京に帰らなければと思っていたこともあり、『きずな新聞』が終刊するときに東京に帰るのかなと思っていました。

ところが、活動を支えてくれていたボランティアの人たちに終刊の挨拶をしたところ、皆さんが「残念ですね、私は続けたいです」と結構言うてくださったのです。ボランティアさんたちには、すぐく申しわけないという気持ちがずっとありました。新聞の記事を書くボランティアさんたちは毎月毎月、私から「締め切りを守れ」、「書け」と言われ、新聞を配るボランティアさんも、雨の日も風の日も、寒い日も暑い日も届けに行くと大変と書いていましたので、活動をしないで済むなら、ほっとするのはないかという気持ちがあったのです。でも意外なことに、関わった人はやり甲斐や生き甲斐を感じながら携わっていたので、是非何らかの形で続けてほしいという声が上がりました。

読者の方々からは続けてほしいという声があって、予想した通りでした。『仮設きずな新聞』が途中、資金難等で休刊する度に続けてほしいという声がよく上がっていたので、今回も言われるだろうなと思っていました。その声には屈さないつもりだったのですが、意外なことにボランティアさんからも声が上がって、そんなふうに言うてくれるのであれば、形を変えて続けていけるのではないかと思います。どういう形だったらやれるか、一人ひとりと話し、私がPBVを辞めて新しい団体を作り、代表をやるのが一番シンプルで、一番現実的で、一番最後まで続けられる形なのではないかということになりました。

今は、最後の一人が仮設住宅を出るまで続けようと、ボランティアさんたちと「最後まで頑張ろうね」、「あと1年半だね」と言いながら活動しています。月に1回発行していて(部数は)仮設住宅が1,300部ぐらい、復興公営住宅は3,500部ぐらいです。

—復興公営住宅にも。

仮設を出て移った人から「新聞が読めなくなっちゃった。届かなくなって寂しかった」という声をたくさん聞いていたので、『復興きずな新聞』として再スタートしてから、復興住宅にも配るようになりました。「復興住宅にも配ってくれてありがとう」というメールがすごく届いています。仮設の人は支援されるのに慣れていますが、復興公営住宅では「ここまで届けに来てくれる」と、すごく喜ばれた感じがありました。

—仮設住宅と復興住宅の両方に目配りするのは大変ですね。

両方やっている方が今はやりやすいなと思っています。昨年度1年間は、仮設が倍ぐらいあったので、仮設は戸別に訪問し、復興住宅は基本的にポスティングでした。でも復興住宅の人からの反響がすごく、読者アンケートでも復興住宅の方が返ってくるし、メールも来ます。アンケートでは「いつまでも被災者扱いするな」という内容も1通ありましたし、もうボランティアに世話を焼かれるのは嫌という人もいるだろうなと思っていました。一方で、復興住宅の状況もやばいだろうなと。復興住宅で喜ばれていることが分かったので今年度からは、復興住宅の戸別訪問も、団地を選びつつやっています。

復興住宅で、住民さんは本当に話が長い。どれだけ普段、人と話していないのだろう、話したいことが溜まっているのだろうと。仮設では壁が薄かったから隣の人の気配がして、それだけで安心感があったのが、今は鉄の扉に阻まれて遮断されている感じがして。集会所も開かないし、どう使っているとか、1時間いくらかルールを作っていないから、仮設のようにイベントもないし、ボランティアさんも来ない。隣に誰が住んでいるのか知らない状況が、ほとんどの団地で見られます。復興住宅に移るのは、全然ゴールではない。ここからが大変だし、簡単に引越すわけにもいなくて、ずっと最後まで住むかもしれないところで、このスタートはなかなかきついただろうなと思っています。

仮設に住んでいる人たちもゆくゆくは復興住宅に移って、こういう壁にぶつかるだろうなというのが何となく見えるのです。復興住宅の課題が見えながら仮設の支援をするのは、次が見えるからやりやすいなという気持ちです。

—新聞の内容は。

今、記事を書いてくれる人が10人ぐらい。市民もいらっしゃるし、よそからやってきて支援団体に所属している方もいらしゃいます。読者のニーズの高い医療健康系の記事はナースや医学療法士に書いてもらいます。健康体操や高血圧対策、ヒートショック予防という内容や、心のケアですね。「からこるステーション」さんという震災後にできて心の復興や心のケアをやっている団体さんに、心のケアは毎回だとちょっと重たいので、3カ月に1回、PTSDやアルコールの問題、不眠、鬱といったことを書いてもらっています。

あとは、まちなか(市中心部)の情報です。石巻のまちなかは被害の大きかったところで、昔はすごく栄えていたので「今行っても寂しいし、震災で風景が変わってしまったし、あまり行きたくない」という声が多いのです。私たちはまちなかに拠点を置いて活動していたので、まちなかの人たちが、まちを盛り上げていくために頑張っている姿も見てきました。仮設の人に興味を持ってもらって、新しい町も見守ってもらえたらいいなと思っていたので、「街づくりまんぼう」さんという会社のスタッフの方に毎回記事を書いてもらっています。

元上司には防災・減災の記事を3カ月に1回ぐらい書いてもらっています。

石巻の市民に書いてもらうコーナーもあって、郡部と言われる牡鹿半島、雄勝、北上、河北地区(大川地区)という石巻の4つの地域にそれぞれお住まいの方や、大川に以前住んでいた方、牡鹿や雄勝にゆかりのある方々に、2回に1回ぐらいずつエッセイのような形で書いてもらっています。

代表は私ですが、副代表は夫です。夫は東京の出版社に勤めていて、東京でかなりの部分、新聞の編集をしています。『仮設きずな新聞』の編集はほぼ私一人でやっていたのですが、私の今のメインの仕事は資金調達と、地元のスタッフやボランティアさんが活動しやすくなるような環境づくりです。この事務所は去年の5月から借りていますが、昨年度の1年間は事務所なしでした。突然団体を作ることになって、お金もなかったの、「かめ七」さんという呉服店に居候させてもらいながら、デスクもなく、膝の上にパソコンを置いて新聞を作ってきました。「かめ七」さんが再開発で建物を取り壊さなければならなくなったタイミングで、物件を探してここにたどり着きました。2階はボランティアさんが宿泊できる部屋で、月に何回か、県外からのボランティアさんも泊まっています。1階は事務所ということにして、地元のスタッフとかボランティアさんがミーティングしたり、活動したりするときに使っています。

—新聞の手渡しを基本にしているということですが。

手渡しにこだわるのは、阪神・淡路大震災で仮設住宅での孤独死がたくさんあり、抽選でどこの仮設住宅に入るかが決まるので、知り合いが周りにいなくて引きこもりがちになるということが言われていたので、孤独死防止、見守り活動の一環という感じでした。だんだんと住民さんの顔も見えてきて、この人はちょっと心配だなとか、いろいろ見えてくる中で、私たちが四六時中見守るのは無理ということが分かってきました。やっぱり住民さん同士でつながることが大事なんじゃないかと、途中からピースボートは毎日集会所でお茶会を開いて、住民さん同士をつなげるところに活動の重きをシフトして、新聞はついでに配る時期が1年ぐらいありました。震災から2年半か3年たったころ、お茶会に同じ人しか来なくなって「やっぱり来ない人が心配だよ」と。また戸別訪問を増やしました。ただ、人手とお金の問題があって、毎週の発行は難しくなってしまったので、月2回になりました。

配ったときに「聞いてほしい話がある」、「ご近所さんとこんなトラブルがある」とか、将来の不安、「行政に不満がある」、「ぜひボランティアさんに聞いてほしい」とか、ご近所さんとなかなか話せないような話を聞いてほしいと、たくさんお話をされる方が、長い方だと2~3時間という方が増えてきました。

「どうぞどうぞ、来てください」という人ばかりではないのです。ボランティアさんにとっては、ウエルカムな対応をされないこともあります。そういう人の方が心配だと思っています。「いつもありがとう」と感謝を言葉で表せる人は、多分誰に対してもよく接することができるから、友達もたくさんいるし、助けてくれる人もいる。気むずかしかったり、カリカリしていたり、何でもないようなことですごく怒鳴ってしまう人は、ご近所さんともうまくやれていない可能性があるの心配だと思っています。イベントも、そういう人は多分来ないです。私たちは出かけていくから、そういう人がいることが分かりますし、ご近所さんとどんな関係かも、ご近所さんとお話をするから分かります。そうい

う方と私たちが長く話していると「何か変なこと言われなかったか」とか、「あいつは近所では変人で通ってるんだぞ」と言う方もいます。でも、そういう方でも、来てくれたということで話をしてくれる方もいらっしやるし。訪問してお話を聞くからこそその難しさもあるし、意義もすごくあるのかなと感じます。

—仮設住宅にいる人はどう情報を入手していますか。市が発行する広報が届いているはずですが、仮設で目を通している人という人にあまり会いません。

『仮設きずな新聞』が50号で一度休刊し、続けるかどうかというタイミングで読者アンケートをしたことがあります。続けてほしいという声が圧倒的に多かったのに加えて、生活の情報がない、『きずな新聞』が情報源になっているという方が多くいることが見えてきました。震災の前までは必要な情報は口コミで入っていたのが、仮設住宅になってコミュニティが崩壊して入ってこなくなったということなのだと思います。これは発行を再開した方がいいとなり、郡部はもっと情報がないだろうと配付範囲を広げました。64の仮設住宅団地に配っていたのを134団地に増やし、7,500部を発行して配りました。

—新聞をつくる上で気を付けている点は。

新聞と言いつつこれは手紙なのです。今までの号を全部とってあるという人がたくさんいます。百何十回出しているのですが、封筒に全部きれいにとってあって、復興住宅にも持っていくという方がいます。新聞って普通はそんなにとっておかないじゃないですか。ボランティアさんから届いた手紙と思って受け取っているのだらうなど。だから全部の記事が記名なのです。私が書いた記事には「きずな新聞あき」と書いてありますし、ほかの方が書く記事も全部ニックネームで、親しみが持てるような記名にしています。そういうところもあって、読みやすいというものもあるかもしれません。

普通の新聞は客観的に事実をきちっと書くのだと思いますが、私たちの新聞は、「皆さんこんにちは、寒い日が続きますね」から始まるようなエッセイ調です。ところどころ記者自身の内容も入って、「私事ですが、息子が生まれました」とか。いつも書いてくださっている藤戸先生という病院の先生は、開成団地の仮診療所でずっと診ていらして有名なので、「藤戸先生、パパになったのね」とか「おめでとう、って言うておいて」とか言われたり。親しみが持てるような、人物に感情移入できるような感じにしています。「あきちゃんファン」がいて、最初に編集後記を読むと言ってくださいの方も結構います。編集後記に、私は「結婚式をしました」のようにプライベートを載せているのですが、応援したくなるキャラクターをちょっとだけ意識しています。「風邪をひいた」と書くと、「風邪大丈夫？」とメールが来たりします。人って、応援されているより、誰かを応援したり、「頑張ってるね」と声をかけてあげる方が、その人自身が元気になれると思うのです。だからあまり、私が「皆さん、大丈夫ですか」という新聞より、「私、頑張っているのですが、ダメなのです」と言って住民さんが励ましてくれるような、励まされキャラのようなものをちょっとだけ考えています。

—ボランティアも同じかもしれませんね。

ボランティアさんも、応援されてなんぼだなと思います。仮設を回っていると、ジュースとかお漬物とか、たくさんいただくのです。一応お断りするのですが、「いいから、いいから。せっかく来てくれているから」と言って、冷蔵庫からいろいろ出てくるのです。ときには持てないぐらい、ワカメとか大根とか卵とか、どこに買い物に行ってきたのだというぐらい。

—住民と接するボランティアにはどんな対応をされていますか。

ボランティアさんが行く前に必ずオリエンテーションをやります。2時間ぐらいかけて、今の仮設住宅の状況や注意点などをお伝えしたり、石巻の被害状況の確認をしたりしています。県外から来る方は、当時テレビで流されていた一番ひどい状況を思い浮かべて来たりするのです。あのときと比べると、今はすごく日常が平和なので、大したことないですねとか、結構復興しているのですね、のようにおっしゃったりするので、目に見える問題だけじゃないことを伝えるようにしています。仮設住宅は家賃が無料で、広さの話もしますが、私が初めて仮設住宅に行ったとき、わりと広いじゃないと

思ってしまったのです。でも石巻の人たちはもっと広いうちに住んでいたから、今の生活がどんなに大変か、苦しいかということを考えてもらっています。壁が薄くて隣の家の寝言も聞こえるなどの騒音、結露やカビなどは、行ってすぐ分かる問題ではないので、長く暮らすことの苦勞を補足したりしています。

—いま訪れるボランティアはどんな方が多いのですか。

初めて来る人の方が多いです。大学生は、当時中学生や小学生でしたから、来る選択肢がなかったのです。ずっと気になっていて、当時は何もできなかったという思いで来る大学生はたくさんいらっしゃいます。埼玉の浦和学院高校や東京の武蔵野大学と提携して、夏休みや授業の一環でボランティアの受け入れをしています。「どうして来たの」と聞くと、「当時何もできなかったから、できる年齢になったので来てみました」という方が多いです。

きょう来ていた方は新潟の女性で、初めて石巻のボランティアに来たそうです。現状を見てみたいというか、テレビ等でも報道されなくなって、今どうなっているのだろうと自分の目で見てみたい人が多いようです。私としては1回来てくれるのも大事だけれども、何回も来てほしいと思います。私たちも楽し、住民さんも何度も来てくれている人がいると嬉しいし、多少でも、地理とか有名なものとか、おいしいものとか、石巻を知っている方が住民さんとも話が盛り上がるので。今年度は、2回目以降に来る人は交通費補助として5,000円出しますという大盤振る舞いをしているのですが。

自分の目で見てみたいと思っても、観光ではちょっと気が引けるという方も多くて、ボランティアだから石巻に来られたと言ってくださる方もいらっしゃいます。うちの活動は誰でもできると思っていたのです。体力要らないし。でもやっぱり結構難しいかもしれないと最近思ってきました。人と話をするのは、なかなかスキルが測れないのです。がれきの撤去は、運動をしていたとか、力持ちとかで役に立てるとある程度分かるけれども、人と話をして、楽しい時間を提供するとか、話してもらって心がすっきりするとかは、自分にその能力があるかどうかを測れないので、思っていたより全然できないと苦勞されたり、何のために来たのだろう、全然役に立ってない、とものがく方もいます。泣いてしまうボランティアさんもいて、ケアも大変です。

決まった地元のメンバーでやった方が早いし、手間も少ないと感じることもありますが、でも外から人が来ることに意義があるし、お金を落としてもらえたり、石巻のファンになってもらえたり、石巻の応援団になってもらえたら、それははかりしれない価値と思うので、大変ながらやっています。年間200人ぐらい新規の人が、活動を通して石巻に来てくれています。昔はがっかり、みっちり、活動だけしてバイバイという感じでしたが、最近ではできるだけ石巻のおいしい物も食べてもらって、楽しい思いもしてもらいたいので、土日は私も晩ご飯を一緒に外へ食べに行っています。私は魚はいつでも食べられるので、大金を出してあまり食べたくないのですが。魚はもらうか食べさせてもらうものと思っているのですが、そうもいかない、居酒屋でおいしいお酒とおいしいお魚を食べます。けさは5時50分に起きて、みんなで日和山で6時半から体操をしました。おじいちゃんたちと交流してもらって、日和山からの景色を見て、前はあそこに病院があつてとか、写真を見せて説明して、石巻を知ってもらう時間、石巻のファンになってもらう要素も大事にしています。

—活動はいつまで…

何とも言えないのですが(笑)。そのときになってみないと分からない部分もたくさんあります。私としては、少なくとも仮設住宅がなくなるまでは、最後の一人が仮設を出るまでやると言って新しくスタートさせたので、そこまではやっていこうと思っています。

助成金を取れるのが運営的には一番楽になるので、もう1年度か2年度、助成金をいただいてやれたらいいなと思っています。取れなかったら形を変えればいだけで、発行頻度が2カ月に1度になってしまうかもしれませんし、やり方を変えて、お金がかからないようにする方法もあると思います。私個人は、このクオリティで、この体制でもう1年か2年やれるために助成金を取りたいと思います。助成金は、取れば苦勞を全部忘れて「活動に専念できる」という感じです。今もらっている助成金が3月で終わるので、今から次年度の助成金を探して、今もらっている助成金の報告書を書きながら、次の助成金の申請書を書くのが1月から5月までです。それがまた始まる、という感じです。

一助成金でどの団体も苦労していますね。

去年とおとし、助成金の申請書を書きましたけれども、ほんとにどうにかなっちゃいそうですね。気が気じゃないし、今日ぐらいまでにメールで連絡が来るはずとなると、3分おきぐらいに「まだ来ない、まだ来ない、なんで来ないのだろう、今月末までに来るはずなのに」と…。

今、地元のスタッフを2人雇用しています。主婦で、フルタイムで雇用するお金はないので週2〜3回ずつ来てもらっています。「来年度はどうしますか、辞めたいとか減らしたいという希望があれば助成金も変えなければいけないから」と言ったら、絶対にやりたいと。自分がすごく素でいられて、県外の人もいろいろ出会えて、いい人がすごく集まっていると言うのです。こんなに気持ちのいい空間はないと言ってきて、そんなふうに見えるのかなと。

その次は、仮設住宅がほぼなくなるので助成金がないか、取れないのではないかと思います。そのときどうしようという話を彼女たちはしていて、私は「続けたいなら続けていいよ」と言っています。私は東京に家があって夫がいるので「そうになったらもうやらない」と言っています。仮設がなくなって、復興公営住宅の支援とやっていったらエンドレスだから私はできないけれども、2人が続けたいなら、私は東京で助成金の申請書を書くのと新聞の編集をボランティアでするぐらいなら続けられますと。2人分の人件費と維持費ぐらいなら、少額の助成金と、賛助会員の会費や寄附で回していけるかもしれません。続けていきたいかどうか考えて、やりたいならやれる方法を考えようと。

この活動を絶対に続けることが善とは思ってなくて、ほんとはやりたくないのとか、家族が遠くに住んでいるのとか、いろいろなものや自分の人生を犠牲にして、でもやってほしい人がいるからしょうがなくやるというのは、絶対やらないほうがいいと思っています。そんなことを知ったら、新聞を読んでいる住民さんは、相当不幸な気持ちになると思うのです。自分がハッピーでできる人が揃っていて、お金も何となくついてくる状況がなければ、続けない方がいいかなと思います。

よく「岩元さんがいなくなっても続くといいですね」とか、「どうやって続けていくのですか」と言われますが、新聞を続けるのは私にとって目的でも目標でもないのです。新聞があれば活動しやすくなるから、訪問できるから。手ぶらで訪問するわけにはいかないので新聞を作っているけれども、新聞が残ることも目標ではないし。スピリットが残ればいいなど。新聞を作って情報発信をする大事さを、記事を書く人たちは気づいたと思うのです。こんな反響が来るとか、イベントに来てくれたとか、情報発信は大事だと思います。訪問してみて、こんなに孤立している人がいるのだと。自分のご近所さんはどうだろうとか。それで町内会に入る人もいます。新聞の活動で、コミュニティが大事と気づいて、自分の地域の町内会に関わるようになって、来なくなってしまった人もいました。個人個人に『きずな新聞』のスピリットが残れば、私はすごくいいことをしたと満足です。新聞という紙切れが残るよりも、スピリットが残る方が、この町にとって長い目で見たときに復興につながるかなと思っています。

一災害時にこうした「新聞」の発行は1995年の阪神・淡路大震災でもありました。岩元さんの取り組みが波及してほかの災害でも同じように「新聞」を発行するケースも出てきています。

そうですね。新聞というアイデアは、ピースボートの中で「きずな新聞というのを石巻で発行したら」という声が出てきたのがきっかけです。大もとは、阪神・淡路大震災でピースボートが入って発行した『デイリーニーズ』という避難所向けの新聞だそうです。当時はパソコンがないので手書きで、どこに行くときから炊き出しがあるとか、どこでお風呂に入れますとか、求人情報とか、あげます、譲りますといった情報が入っていました。

神戸にも私たちは研修に行って副編集長だった和田さんという方にお会いしました。その新聞は『ウィークリーニーズ』という形でその後も週刊で、2週間に1回、3年ぐらい発行されたと聞いています。それがモデルになって、石巻で見守り活動の一環に新聞を発行できないかとなったと聞いています。過去のデイリーニュースやウィークリーニュースをもらって、全部読んで、20年前も同じ課題だったという感想でした。中央の市街地が廃れていくとか、「ああ、全く同じじゃないか」と思っすぎて感慨深く読みました。

20年後ぐらいに、東北で私に新聞が読まれるなんて書いた人たちはまさか思ってなかっただろうと思います。今出している新聞も、全然別の場所で20〜30年後に読まれるかもしれないと思っながら

書いています。

東日本大震災の後、伊豆大島や広島で災害があって、石巻で活動したメンバーが入ったのです。仮設住宅に入って、みんな孤立するのが分かっているから、「石巻でこういう新聞を配っています」と言うと、「それ、いいね」と新聞を送るよう言われました。伊豆大島で新聞を配ったメンバーは、もとはピースボートの職員で、伊豆大島の社会福祉協議会に入って、2年間新聞配りをしたそうなので、話を聞かせてもらいました。つながっていくのがすごいですね。

一外から入ってきた人が、こういう媒体を作る。地元の方よりも、やりやすいのでしょうか。

多分、客観的に石巻を見ることができるのだと思います。私の目から見て石巻のすごいところ、素敵などころ、風景にしても食べ物にしても、人にしても、感動できることがあります。心が動かないと記事は書けなくて、新聞を書く上で一番大事なのは感受性と論理性だと思っているのですが、その2つがないと共感してもらって記事は書けないと思っています。感受性とは、どれだけ心が震えるかということですね。同じ風景を見て、同じ場面に立ち会ったときに、どれだけ心が動くか。動かなかったら、文章は書けないと思うのです。私は震災前の様子を知らないから、余計に「すごい」、「石巻の人ってどんな大変な思いをしたのだろう、どれだけ大変だっただろう、でもこんなに前向きに頑張って生きていらっしやる」と、すごく感動できるのです。感動していないことを感動したとは書けないので。外部の視線だからこそ、いいなと思えたり、すごいと思えたりするのはあると思います。

うちはニュース性では勝負できないのです。配るのに3週間かかるので、ニュースを書いても、「今それ？」みたいな感じになってしまうのです。だから余計に、事実を伝える新聞ではなくて、その場にいた人がいったいどんなふうに関心したのかを伝えたい。感動を伝えたいのです。

さらに、記事を読んだ人のアクションにつながらなければ意味がないと思っています、仮設を一步出るきっかけにしてほしいのです。新聞を読んだ人が「あ、こういうイベントがあった。日程も書いてあるから参加してみよう」と、家から一步出るきっかけになるように書いています。どこそこでこんなことがありました、何人集まりました、と一応書きますけれども、そこは大事ではないのです。昨日、おとといぐらいに起きたことはテレビや新聞が伝えるわけです。それは役割の違いかなと思います。

3. 一般社団法人サードステージ代表理事杉浦達也さん、理事新井英児さん

前述したように石巻市では今も仮設住宅で暮らす方がおり、まだ恒久的な住まいに移る道筋が立っていない人も少なくない。それぞれが家計も含めさまざまな困難を抱えている。

一般社団法人サードステージは「自立生活支援委託事業」として宮城県石巻市の委託を受けて支援を必要とする方々を個別に回り、各戸の事情を踏まえながらどんな方策がいいのかを模索し、制度の情報提供や手続きなどの支援を続けてきた。

事業のもう一つの柱が、震災以降から継続している石巻市の東端に位置する牡鹿半島でのさまざまな活動である。「牡鹿半島ネットワーク協議会」や「浜へ行こう！実行委員会」、「寄らいん牡鹿」…。牡鹿半島の総合商社とでも呼ぶべき内容で、どの浜からも声が掛かる顔の広さは震災以後のメンバーの地道な取り組みの証左であり、地元の信頼は厚い。今回は大原浜の古民家食堂「いぶき」で正午前後に昼食をとりながら代表理事の杉浦達也さん、理事の新井英児さんからお話をうかがった。



写真3：杉浦達也さん



写真4：新井英児さん

—団体ができた経緯から。

(新井) 私たちは震災以降、石巻で国際 NGO の JEN(ジェン)という団体に所属して復興支援事業に携わってきました。JEN は緊急支援団体という特性もあり、5年半が経過した 2015 年 10 月末の段階で石巻の事務所を撤収する形になりました。ただ、石巻では、まだまだ仮設住宅にお住まいの方がたくさんいらっしゃり、自立の道筋が定まっていなかった方が多かったのです。

そんな折に、復興支援事業で、仮設住宅に住んでいる方たちが次の恒久的な住まいにどう移っていったらいいのか、支援活動をすることが決まったというお話を石巻市からいただきました。これまで仮設住宅に関わり、なおかつ、状況を把握してアドバイスができる方たちにお話ししたいというお話でした。それならば、まだ自分達にはこの石巻でやるべきことがあるという思いから、団体を立ち上げるきっかけにもなりました。仮設住宅で暮す方々が次の生活への一歩を踏み出せるような形を取ってほしいのではないかと。ですので、サードステージの活動の柱として「自立生活支援委託事業」があります。

サードステージという名前にしたのも意味があります。震災前の暮らしをファーストステージと位置付け、震災後の大変な時期をセカンドステージ、そして次のステージに向かうための一歩をとともに関わって行きたいという思いでサードステージという名前をつけました(ロゴについても3段の階段状にし、3段目を上る所を共に進む意味で青い矢印を入れています)。

石巻市の委託を受け、2年が経ちます。プレハブの仮設住宅に住んでいる方も、民間賃貸の借上げ住宅、いわゆるみなし仮設に住んでいる方もたくさんいらっしゃるのですが、今年の3月から次々に供与期限(仮設住宅に入居出来る最終的な期限)を迎えていきます。全ての方々が復興住宅に入れるわけではないですし、いろいろな理由で条件の合わない方もいらっしゃるの、市営住宅や県営住宅のご案内や、賃貸住宅のご案内も差上げています。病院に通われている方もおりますし、6年間ずっと仮設住宅での生活を続けて来たため馴染んでしまい、そこから新しいコミュニティに入ることも高齢の方は精神的負担が大きいのです。そのままそこに住むにしても、どういった形で安心して暮らしていけるのか、一つ一つ、関わっている方たちに大きく差がありますから、それぞれの世帯に合わせてご案内していくため、訪問を繰り返しながらお話しをしています。

(杉浦) だいたい、プレハブ仮設とみなし仮設を合わせて約 2,500 世帯あって約 5,000 名の方が住まわれています(2018年1月12日時点)。いま残っている方々は、一つの問題で再建が延びている訳ではないのです。健康、お金、仕事、家、家庭の問題と、いろいろな事が重複して複雑に絡み合っており、次の一歩が踏み出しづらい方が多いのです。現在、伴走しながら一緒に寄り添って、一緒に考えていくことを進めている段階です。

(新井) 昨年9月、石巻市もプレハブ仮設住宅の集約がされました。134ヶ所以上の仮設団地があったのですが、一つの団地が3分の1以下の世帯数になった段階で集約し、集約拠点団地となった仮設団地に入居者の方々が集まりました。集約拠点団地も私たちが担当するエリアの一つです。今年6月から、集約拠点団地もどんどん供与期限が終了していきますので、自立生活支援事業はいよいよ大詰めです。

(杉浦) 石巻市にとって大きな区切りの一つになるのではないかと思います。

(新井) 供与期限がまだ半年あると思って気持ちに余裕を持っている方もいらっしゃいます。私たちがやっている事は、そうした方たちの意識を少しずつ変えていく作業です。一つ一つの対話がすごく大切になってきますので、丁寧に進めている段階になります。そのために来年度は支援員を増やしません。

—制度の情報提供や手続きの支援もされていますか。

(杉浦) 不安を抱えている方々と一緒に市役所の窓口に行って、手続きのお手伝いをしたりしています。

(新井) 高齢で独居の方ですか、体調面や精神面で疾患を持っている方もいらっしゃいます。「市役所の窓口に行って下さいね」と言っても自分だけではなかなか分からなかったり、できなかったりする方もいますので、一緒に窓口まで行ってあげて、一緒にお話を聞いて、必要な書類の手続きを進めていく作業もしております。

(杉浦) 私たちは定期的に支援対象世帯を訪問しています。自立未定世帯となっている方々や、行政

側から「この方を回ってもらえますか」という人たちも含めて、担当するエリアを回っています。その中で入ってきた情報、社会福祉協議会や地域の人と連携する中で、よりよい方法を一緒に考えながら、一つ一つ寄り添って伴走する感じです。行政側とも常に話し合いをしまして。「今こういう状況ですよ。こういう方がいますよ」と。専門の方に繋げるケースもあります。心配しているのは、まだ問題を抱えていても表に出てこられていない人もいるかもしれないということです。訪問する際は常に「アンテナを張って」と言って細かく気を配っているのですが、そこに引っかかっていない人もいないかという思いもあり、常にパーフェクトではないと思っています。

—みなし仮設も回っているのですね。大変ですね。

(杉浦) 1軒1軒回っています。市役所から名簿をお預かりし、地図で調べながら探し出して。みなし仮設入居者で約270世帯ぐらいを担当してきました。

—1軒1軒、抱える事情は違う…。

(新井) 急きょ状況が変わる方もたくさんいらっしゃいます。最初は復興住宅にしようと思募した方もなかなか抽選に当たらなかつたり、当たってはみたものの、入居の費用や家賃が思った以上に掛かることが分かり変えたいという方が出てきたり。本当にいろいろなパターンが、いま、出てきています。

(杉浦) 「あそこの場所、残るのでしょうか。あそこに住めないの?」とか、どこからか憶測の話が出てしまい、混乱してしまっているとか。

(新井) 正しい情報を伝えるのが難しいというところもありますね。われわれも、その都度、行政側との会議やいろいろな形で情報共有をしながら皆さんにご案内をするのですが、変に話を聞いている方もいらっしゃいますので。

—訪問する形態は。

(新井) 昨年は、私たち2人で訪問していました。ほかの受託団体さんは男女ペアで訪問していて、周囲からは「男性2人で大丈夫ですか」と最初は心配されました。JENのころから一緒に組んでやっていますので、「大丈夫です」と伝えてます。

(杉浦) 経験は必要かもしれませんが、資格とかよりも、コミュニケーション能力がまず必要かなと思います。会話はすごく大切になってきますので。よく「引き出しを開ける」と言うのですが、相手が話を返しやすい会話をするとか、キャッチボールがしやすい内容をいかにつくるか引き出せるかが大切です。最後は笑って「また来るからね」と、「顔とお腹は覚えててね」とひといい。次に会ったとき、お腹をさすりながら行くと「ああ、あんたたちね」と。次に会うための形をつくっておくのも含めて、コミュニケーションをすごく大切にして、その人の言った言葉、せっかく開けてくれた引き出しの言葉、一つ一つを大切にします。アンテナを張ることで、この人はなぜこういう言い方をしたのかなとか、キーワードの一つ一つを広げてあげる。中には話すのが苦手な方もいますが、そういった方でも自然に引き出しを開けてくれるように、コミュニケーションを常に意識しています。

—震災以前のご活動は。

(杉浦) 飲食店経営をしていました。地元で震災に遭い色々なことがあったため、このままでは駄目だと思って、地元のために何かできることはないかと思っていたときにJENの活動を知り、ここなら何か人の役に立てるのではないかと2011年4月から入ったのです。地元からの採用はアルバイトスタッフを合わせると延べ100人ぐらいではないですか。私が入った頃は当時10人ぐらいでした。世界中から支援していただいたお金を大切にに使わせていただき、仮設住宅に入って、私が責任者としてアルバイトさん達と生活支援物資の搬入などをやらせてもらったのです。地元の方は働き口がなかったり、悩んだり、ストレスをためて何をしたらいいか分からなかったり、収入もなくて、会社が壊れたとかいっぱいあったので、地元からの雇用でやれたことがとても良かったですね。

(新井) 私がJENに入ったのは震災の年の7月です。そこからコミュニティ支援などを担当しました。住まいは塩竈市で、毎日通ってきています。たまたま震災で仕事がなくなった状態で、自分も何かで

きることはないかと職を探しているときに JEN に応募し、採用していただきました。

—JEN は新潟県中越地震でも集落支援をしていました。

(杉浦) JEN が中越でやってきたことを、サードステージでしている面はあると思います。いまスタッフは4名で、来年また2名増やす予定です。自立生活支援事業で、直接委託を受けているのは6団体です。

—住民の事情を理解しないといけないし、精神的にきつとも思いますが。

(杉浦) 支援対象者を訪問した後は社内で常に話すようにしています。私も当事者として経験もしています。個人情報あまりにも多いので、スタッフ内で共有して、心の中に溜め込んでしまわないように全部を話せる形をつくっています。スタッフが吐き出したことに結構ヒントがあるのです。「本当はそういうところで引っかかっていたのだな」と。そのひと言で、実はこういうところがつなっていた、という例があるので。アンテナを張る事が必要ですね。

—団体の形態は一般社団法人で。

(杉浦) NPO も考えたかったですけど。私達2人でやっていくと考えていましたし、行政からもすぐに話が来たのです。コミュニティ支援をやってきて「JEN さんを卒業してこういう形をつくるのであればぜひ」、という話をいただきました。NPO を立ち上げるためだけに人を引き寄せるのも変です。2人でやりたいことがあるなら、2人でやれる形をつくろうと一般社団法人にしました。

—市からの委託費以外で資金面、助成金は？

(杉浦) 平日の日中は、自立生活支援事業をメインとして活動してましたので、土日は牡鹿半島の事業を中心に、収益の事はほとんど考えずに活動していました。リボンアートフェスティバル、3.11 のことなどは、平日の夕方や夜も動いています。休みはしょうがないかなあと。

—委託事業が終わると、収入源は…。

(杉浦) どうするかということも話し合っています。お金を取るためにはしたくないので。必要であれば助成金もあるかもしれませんが。最初から助成金に頼りたくなかったのです。いまは、委託をいただいているので、委託事業をしっかりして、来年度、次の方向性については一生懸命話し合っています。

—リボンアートフェスティバルは昨年の大きなイベントでしたね。

(杉浦) 1 回目ということもあって地元では不安の声が大きかったと思います。地元の方が交流しながら当事者意識を持ってやれた事は少なかったかなと。「地域の方をもっと巻き込みたいから間に入ってもらえませんか」と話が来ました。私は地域のために素晴らしいきっかけになるのだったらと思いを受けてました。

(新井) 音楽プロデューサーの小林武史さんが、ap bank という団体を立ち上げ、ずっと震災支援を続けていらっしました。石巻で復興に拍車をかけるきっかけをつくれないかとやったのが、リボンアートフェスティバルでした。さまざまな場所でイベントをやったり、アート作品を置いていただいたりしました。準備の中で地域の意見を伺いたいと呼ばれて、小林さんに上がっている内容と地元の温度差とのギャップを感じたのです。それを伝える中で「力を貸してほしい」という話をいただきました。告知とか、調整とか、地域にはキーマンがいますので、うまく伝えないと、いいことをやるにしても賛同をいただけなくなりますので、入らせてもらいました。チラシやポスターが出来上がったのは開催ギリギリで、牡鹿半島の各世帯を1軒1軒訪問して。イベントを知らない方がほとんどで少しでも知っていただけるように話をしました。期間中も受付やインフォメーションセンターでの案内、担当エリアのマネジメントをしました。

(杉浦) 石巻のためという思いでしたし、これをやれると、ほかもできると思ったので。一つ、小さな成功体験でいいのでつくれたらということもありました。牡鹿半島の人たちの不安が不満に変わ

つてきたところが見えてきたので、急きょ、関わるように決めたのです。音楽も、食も、アートも、心を動かすところがあると思ったので、地元のためになるのであれば、との思いでした。

(新井) 小林さんからは「いやあ、初めてだよ。初対面で俺に向かってガチャガチャ言ってくるやつは」と、代表の杉浦がえらく、気に入られてしまっ。

あと、「3.11 メモリアルネットワーク」という活動があります。石巻市内の南浜町という被害が大きかった場所に復興公園ができます。石巻で活動している方が集まって、震災を未来にどう伝えてくのか会議を重ねています。代表の杉浦は理事として活動する事になりました。

牡鹿半島の事業では、「牡鹿半島ネットワーク協議会」という会の事務局をやっています。牡鹿半島に、震災後いろいろな団体が支援活動で入りましたが、「牡鹿半島全体の問題を話し合う場がないよね」となったのです。さまざまな団体、企業、地元の方、行政、警察、消防、約30以上の団体が加盟して、月1回、浜の集会所に集まって、参加者同士の新しいつながりを生んだり、課題に取り組めることはないかと話し合いをしてきています。

共通課題の一つとして牡鹿半島清掃という活動もあります。牡鹿半島の主要道路になっている県道2号沿いは、以前からポイ捨てゴミが非常に多いのです。浜の清掃はあるのですが、浜と浜の間や、人が見ていないところはものすごく多い。まず、拾ってみようとして2人で始めたのです。

(杉浦) 自分たちがやらないと分からないと思ったので。経験を積んで、みんなで拾えるね、と広がって、市や県からサポートをもらうようになりました、いまは2、3カ月に1回ぐらい、やっています。

(新井) やるたびに、軽トラック7、8台分以上のゴミが集まりました。石巻市からはゴミ袋をいただいたり、宮城県からは活動する方の保険のサポートをいただいたり、安心、安全も準備してやっています。

(杉浦) 2人で始めた活動が現在では100人ぐらい参加していただけるようになったのです。地元の住民や女性部、漁協、企業、団体など。地元の方々が関わりやすくなる形ができたのではないかと。ちゃんとゴミを拾おうとか、話し合ったことで、自分たちの当事者意識がすごく持てるようになって。最初は地域の方から「何をやっているの?」という話から、1回ゴミを拾ってみると、捨てなくなったりとか、捨てる人を見つけると声をかけたり。意識が変わってきていると。

(新井) 「牡鹿半島ネットワーク協議会」は、JENの活動で立ち上げました。

(杉浦) JENの事業が終わる前に形にしておこうと思って、つくろうと持ちかけたのです。話し合いの場がないときはいろいろな団体がバラバラにやっていた。ちょっと話をすれば役割分担できることもあったり、共同作業できたりということがいっぱいあったのです。協議会で実際、いろいろな形が生まれて、一緒に作業が増えたり、連携も増えたりと。新しく入ってきた人たちも、協議会に参加することによって、牡鹿半島での活動に入りやすくなっているところもあります。

(新井) 「浜へ行こう！実行委員会」という活動があります。震災後のいろいろなボランティアさんたちの活動がきっかけで、地元の方たちも助けてもらうことがたくさんあり、恩返しをしたいという思いで立ち上がりました。牡鹿半島はおいしいものも素晴らしい景色もたくさんありますし、歴史的にも文化的にも特色がありますので、伝えていきたい思いが大きかったのです。そこで地元の方から相談をいただいて始まったのが、「浜へ行こう！実行委員会」です。漁業体験であれば、カキ、ホヤ、ワカメなどが季節によって様々な体験ができます。地域の生業も体験してもらい、おいしいものをたくさん食べていただきたいと。地域の方との交流を大事にしたいと思っているのです。ただ来て「ああ、楽しかった」というのではなく、ここで生活している方たちと触れ合うことで、当時話せなかった震災のことも含めて、どうやって乗り越えてきたのかとか、地域としてどう頑張ってきたのかとか、現在はどんな暮らしかと、話をする場を大事にしています。

(杉浦) 参加者のリピーター率は3割を越えています。人との触れ合いが大きくて、話を聞くだけではなくて地元の人と一緒にご飯をつくったり、いろんな体験したりすることで、より話がしやすくなる。「また帰ってきます」という形につながっています。今では教育旅行・企業研修の受け入れや防災・体験プログラムもしております。

(新井) 活動が終わるたびに「行ってらっしゃい」と言うのです。また来てくれた方に「お帰りなさい」とやるのが一番の楽しみなのです。

(新井) 「寄らばいん牡鹿」という活動があります。牡鹿半島の地域住民同士の助け合いの会です。代表

の方が76歳なのですが、中心となって始めた団体です。牡鹿半島は高齢化率が6割を超えています。独居の方もたくさんいらっしゃいますし、ケアサービスを受けにくい地域でもあるのです。地域の方同士で助け合えないかと始まったのがこの会です。会員を募り、なっていただいた方は、連絡をいただけたら、庭の草むしり、ゴミ捨て、病院に行くときの付き添いとして車の送迎から診察券を出したり薬と一緒に取ってあげたり、帰りに買物に寄ってあげたりしながら、助け合いの会をやっているのですが、無償でやっているわけではないです。地域の方の心情としてタダでは非常にお願いづらいという方が多いので会員になって、感謝金をいただくことで頼みやすくなり、持ちつ持たれつでやっていくことができます。私たちは事務局・青年部として関わるようにしてしまっていて、役員になっております。青年部で「寄らぬ牡鹿」の活動を外部にお伝えして、外の方とつなぐことをやっています。

(杉浦) 自分たち中間世代が青年部とわざとやっているのは、自分たちの子ども世代と、親世代をつなげたいという思いがあるからです。子どもは自分の親からちゃんと学習するでしょうし、自分たちが親世代から学んでおけば、うまく回って継続していけるという形をつくりたいのです。

—お2人はもともと知り合いですか。

(杉浦) 前職のJENからです。私の方が年下ですが、最初に入っていて、リーダー、最終的にマネージャーをやったのですが、自分がやっていたコミュニティ支援を新井に引き継ぎ、自分は生業支援を担当して、やれたことでお互いに活かし活かされる関係が築けてきたと思います。

—JENでの活動は行政の理解など現在の仕事につながっていますか。

(杉浦) つながっています。JENで仕事が出来たことは心強い生きる力になっています。自分たちが学んだこともあるし、そこからつながったこともあるし。

—地域おこしのような活動は以前からされていたのですか。

(杉浦) 私は一切。自営で飲食店をやってきたので、NPOのような組織体の活動も私の中では薄かったです。

(新井) 私も一切ないです。地元の町内会は、奥さんの地元で、ご両親に全部お願いしているような形でした。まして、こういうNGO、NPOも関わりがなかったです。JENでいろいろ体験させていただきました。

—杉浦さんは地元の出身で…。

(杉浦) 地元だから当事者意識を持つようになったのが大きいと思います。いろいろなことを気付かせてくれたのが、全国から来てくれたボランティアさんです。本当に力強いと思いましたし、今でも活動を一緒にできた感謝の気持ちが、自分たちの動く力や支えになっています。

牡鹿半島には両親の実家(本家)があります。親の同級生だったり、親のいとこ甥っ子だったり、何だかんだとつながっているのです。正直やりにくいこともありました。父親の実家がある浜は、牡鹿半島の生業支援では最後でしたから。地元でやると「お前の回りばかり」となってしまいます。地域の回りやすさでは、杉浦と言うと、みんな分かってくれるのです。「ああ、杉浦な。あそこの浜だべ」と。最初にスッと会話に入れるのは強かった。ただ、父親の実家のある浜は最後にしました。

ある団体が中心に関わった一つの浜を除いて牡鹿半島に30以上ある浜すべての浜で活動しました。生業やコミュニティ支援も。支援活動の中で、浜のじいさん、ばあさん、父ちゃん、母ちゃんから「杉浦さん、本当に支援ありがとう。最後に一つだけお願いがあるんだよね。うちの息子、孫に、嫁さんを紹介してよ」と。それが牡鹿半島の婚活「浜コン」につながったのです。2回やらせてもらって3組ぐらい結婚して、1組は子どもが生まれて。浜の婚活をすることで、地元に残る、跡継ぎができる、人口が増える、一石六鳥ぐらいになっています。

JENで支援させてもらったとき、浜の人たちが必要としているものを置かせてもらいました。ある浜では地元から「区長も他地域にいないし、ばらばらでうちは話し合いができていない」と相談を受けて、地域の方に協力し震災後はじめて話し合いをする場ができたのです。浜に残るメンバーで町内会をつくるとなり、役員も決まりました。何かしたいことはないですかと話し合う中で、自分たち

のカキを PR したいからカキ小屋をつくりたいと。集まる場がほしいと。そこで集まれる場所としてプレハブの集会所を提供し、さらに半年ぐらいて、地域の人から「ここまで来たなら食堂をやりたい」との話になりまして。浜の父ちゃんたちが朝、漁で獲ってきたものを、母ちゃんたちが料理をして出す食堂「浜友」ができて。生業とコミュニティ再生のダブルで支援することが出来ました。地元に戻ってくる人も10人ぐらいから20人ぐらいに増えて。食堂は、地元の方の体調面もあり多くの方に惜しまれながら去年閉じました。

支援させていただく中で伝えてきたのは、これが提供できるのは世界の支援があつてということですが。ただ「あげます」ではなく、JEN が預かって大切にに使わせてもらった支援という意識を持ってもらうのは、全部の浜でやらせてもらいました。

私は地域のお祭りを大切にしています。牡鹿半島のある地区でもなくなった祭りを13年ぶりに復活させたいと話になり、地域の方々に協力したり働きかけたりとか。お祭りはみんなが集まりやすくなります。「しょうがないな」と言いながら準備して、片付けをしてと、徐々に地元へ帰ってくるきっかけになったり地域の住民を寄せる形なので。私たちはどこへ行ってもお祭りで警備を頼まれます。最初は、よそから来たお手伝いとして担ぎ手をしていたのですが、今では地域の一人として地元の方から警棒を渡されて、手伝いに来てくださった方々が安全に楽しめるように二人で裏方になってます。そうやって入るのが、地域にいちばん溶け込みやすいやり方でもあるんですね。

—以前されていた飲食業や、飲食を通じた場づくりは考えていませんか。

(杉浦) 場づくりにはつながってます。今はなぜ牡鹿半島全体に関わって活動をやれるのかというと、牡鹿半島に拠点を持っていないからなのです。拠点がない分、自由にやるといったら変ですが。これがどこかの浜に入ってしまうと「サードステージの杉浦は、あそこの浜の者だな」となって、自由が利かなくなる。だから、「私は今は拠点を持たないよ」と話しています。そこが、いろいろなところから声をかけてもらうことにもつながるのかなと。あとは、何か言えば2人で入っているいろいろやりながら一緒に汗をかいったり、考えたりすることかな。声は毎回かかりますから。

(新井) そういう立場だからこそ対等で、地域の方も色々な事を言ってきますし、こっちも言いますし。

(杉浦) 住民さんはちょっとしたきっかけがあると対話の仕方を変えられると思っています。閉鎖的でしゃべらなかつたお父さんがいましたが、模型があつて「好きなのかな」と思い話をしました。プラモデルが好きなのかなと。普段文句ばかり言っている人もそうした話から入っていくと、「俺はこういうのが好きで」と。ポロッと会話に加わったりするのです。見極めるアンテナも必要ですけど、常にその人の心の動くものは何なのかと意識しています。

—研修はされているのですか。

(杉浦) 私は飲食をやってきた経験で人を見る、アンテナを張る。この人と話すには、この人が話しやすくなるには、この人と話しやすい体制をつくるには、と常に意識しています。飲食店ではそれを楽しんでいたのです。現在行っている活動でも、地域の方々との対話や様々な場面で経験を活かすことが出来ている事を考えても、原点は飲食業ですね。だからこそ一人一人を観察する形ができたのかなと思います。

(新井) 私はもともと幼児教育の仕事をやっています。その後、営業マンもやっていました。人と話をするとか、説明するとか、いろいろ聞き出して、この人は何を求めているのか、ずっとやってきましたので、人と接するいまの仕事には非常に役に立っていると思います。

(杉浦) 私たちは常に2人で、役割分担があつて。お互いに活かし生かされています。説明をする、聞いた話を返すパターンです。その人が話しやすい体制をつくってあげられるように。いつでも最後は笑って帰れる感じをつくらうと。たいてい、このお腹をさすれば、みんな、笑ってくれます、この身体をつかったキャラクターさえもコミュニケーション能力の一つにしちゃいますからね(笑)。

4. 一般社団法人はまのね 代表理事 亀山貴一さん

石巻中心部から牡鹿半島に入ると、間もなく県道沿い右手に目印のツリーハウスが見えてくる。緑あふれる山々、きらきら輝く穏やかな海を抱く ^{はまぐりはま} 蛤浜だ。津波の被災から残った民家を改装したカフェ「はまぐり堂」を訪れる客は、小さな湾をながめながら、ゆったり流れる浜の時間を体感する。

カフェのオーナーで一般社団法人「はまのね」代表理事の亀山貴一さんはこの蛤浜で生まれ育った。津波被害に遭った浜がもたらしてくれた豊かな暮らしを途切れさせたくない。困難に直面しながら始めた活動に共感する仲間が増え、輪が広がっている。地元のさまざまな課題に向き合い、事業化を模索しながら、里や海の資源が循環するような暮らしを目指す。各地からの視察も相次ぐ取り組みを亀山さんに語っていただいた。われわれ調査グループ一行は、2018年1月21日(日)、午後1:30、古民家のカフェ「はまぐり堂」でまずはコーヒブレイクし、その後、事務所に移動してお話をうかがった。



写真5：被災後の取り組みをパワーポイント資料を使って説明する亀山貴一さん



写真 6 : 浜に設えられた工房

資料を提示しながらの亀山氏の説明

石巻専修大学では理工学部でマスター(修士課程)を取りました。非常にお世話になりました。ここでやり始めて6年になります。

牡鹿半島はこの蛤浜が入口で、蛤浜の人口は2世帯5人、しかも4人が60代以上で、スーパー限界集落になっています。私も住所はこちらに置いているのですが、実際は住んでいなくて、町から通っています。

カフェはもともと私の自宅で、こちらの「ギャラリー高見」も津波で奥さんが亡くなって引っ越されたので買わせていただいて、使っています。

ここで生まれ育ちまして、子どもの頃は漁師になりたかったのですが、これからは漁業は大変だということで研究者を目指しました。大学院は石巻専修大学へ行って水産高校に勤め、またこの場所に戻ってくることができたのです。とにかくここが好きで、過疎ですが、ここで暮らしたい思いがあった。教員になって実現できて、理想的な生活でした。

震災前も9世帯しかない限界集落でした。同世代がみんな出て行く中で、地元の方は「よく戻ってきたな」とよくしてくれていました。津波でこの辺の家も全部駄目になりました。奥の集会所が残ったので、集落の方は避難所生活を半年ぐらいしていました。私の家は高台なので大丈夫かなと思っていたのですが、女房がたまたま町の実家に行っていて、津波で女房とお母さんとおじいさん、おばあさん、4人が亡くなりました。学校も被災して生徒も8割被災している状況だったので、ここに住むのは無理だと思い、町に引っ越して、もう戻ってくることはないだろうなという感じでした。

震災前はすごく穏やかな砂浜で、夏になると海水浴に来る人がいっぱい、私も毎週末のように友達を呼んで昼間からバーベキューをして酒を飲んでということをやっていました。本当に最高でした。これが地盤沈下で、砂浜もなくなってしまいました。いまだに瓦礫も沈んでいて。今日、ちょうど「うみさくら」という海岸清掃のボランティア活動で小さなものは定期的に除去してもらっています。

私もしばらくは生活の立て直しで大変だったのですが、1年ぐらい経って落ち着いてきて、浜の様子が気になって戻ってきたら、3世帯まで減っていました。瓦礫もまだたくさんあって、残った

人は「これからどうなるのだろう」と不安そうな状況でした。近所の人には子どもの頃からすごくお世話になって好きな場所だったので、何か自分もやりたい思いがありました。そこで1人で、蛤浜再生プロジェクトというものを立ち上げ、持続可能な浜にしていきたいと。暮らし、産業、学びの三本柱を立てて絵を描きました。1人で動いて、お金もないし、仲間もないし、という状況で。NPOや大学の先生に相談したのですが、お金もないし、厳しいよね、という感じで、全然動きませんでした。しかも、ほとんどが災害危険区域で、これ以上家を増やせないのです。この残った建物4戸でどうするかという…。

いろいろあきらめないで動いているうちにいい仲間ができました。同世代のボランティアで県外から来てくれたメンバーが、お金はないけど瓦礫の撤去からやろうと毎週末、みんなで集まって始めました。最初は5人ぐらいでしたが、どんどん一緒にやってくれる人が増えて、多いときは100人ぐらいで撤去をしました。

おおかた片付いてきたので、最初は人が集まる場所としてカフェをつくりたいと思いました。寄附金や助成金を申請したのですが、ことごとく落とされるわけです。こういう立地で、こんなところに人が来るわけがないだろうと。

新築は諦めて自分の家が残っているので、お金をかけずに直してカフェにすることにしました。いまでこそ、古民家カフェは増えてきましたが、6年ぐらい前はあまりなかったですね。私も新しいほうがいいと思っていたのですが、結果、こっちのほうがよかったと思っています。だいたい、結果オーライのパターンが多いのですが、多くの方に関わっていただいたことでオープン初日から、1日50~60人ぐらいのお客さんに来ていただきました。震災後、丸2年の3月11日にオープンしたので、3月で5年になります。この立地でも5年、カフェを続けられたことは自信にもなってくるかなと思います。

カフェの目的は、離れた住民が寄って集まれる場所とか、浜の魅力を伝えて将来こっちに住んでもらったり、ずっと関わっていただいたりできないかと。水産高校の教員時代から、漁業が衰退して六次産業化が言われていましたが、うまくいっている事例はほとんど聞いたことがありません。農業は結構あるのですが、水産はほとんどなくて、何とかやれないかと、カフェでバイトをしたことすらないですが始めました。古い家ですが、新しいものを取り入れながら、幅広い世代に来てほしいと思っています。

地元は漁業がメインですので、地域の食材を活かそうと魚介を中心に山菜やシカ肉などを使っています。シカ肉は食べたことはなかったのですが、シカが増え続けているので活用したいなど。いまでこそジビエは広がってきましたが、当時は「え？シカを食べるの？」と言われていました。今は、だいぶ定着してきました。

私はわざわざ来てもらうためにはフレンチカイタリアンと思っていたのですが、一緒にやってくれた料理人が「浜の暮らしそのものを出したほうがいいよ」ということで、浜の暮らしに近いものを出させてもらっています。

カフェができて、いろいろなイベントをしたり、人が集まることを仕掛けました。ツリーハウスは糸井重里さんのプロジェクトで、東北に100個つくろうといううちの3つ目です。景観を損ねたくなくて、カフェの看板を大きくしたくなかったのが、これがカフェへの目印になっています。

さらに自然学校をやったり、森や海で結婚式をやったりしました。漁船で入場してきて、カツオに入刀して配ったりしました。実は私も昨年、再婚いたしました。新しいスタートということで、カフェでみんなでお祝いしてくれました。

ここ(高見)も学生とリノベーションしてきて本当は宿にしたかったのですが、まだ宿泊まではやれず、2年間、こういうショップとギャラリーにしています。地元の作家さんのオリジナル商品を販売していたのですが、宿泊できるように改装し、視察に来られる方も増えてきたので、研修や学びの場に変更していきます。今後は宿泊できるように改装していく予定です。

いま、年間1万5,000人ぐらいのお客さんに来ていただいています。5年でだいたい7万人ぐらいになります。2年目は復興関係の方も多くて1万8,000人ぐらい、3年目にちょっと落ちたのですが、地道にやって、またお客様も増えて、だいたい1万5,000人ぐらいで推移している感じです。

カフェができたことで、ファンになっていただいたり、いろいろなつながりができたので、山積し

ている地域課題へアプローチしていきたいと思っています。

津波への恐怖で海から離れていく人が多いのですが、また自然に親しんでほしいと思います。ここで育った人は海の恩恵も受けて生きていますし、怖さもよく知っています。海から離れていると、津波が来たときの怖さが分からないので、町のほうが、亡くなった方が多いのです。

砂浜はなくなりましたが、いま、できることをやっという、自然体験でサップ、カヌーを始めました。自分たちで小屋を建てて、バーベキューもできるようにしています。床や外壁には牡鹿半島の木を使っています。手ぶらで来ていただいて、ジビエや魚介を楽しんでもらえる、震災前に私がやってすごく楽しかったことをやっています。

シカは年々増え続け、誰か何とかしてくれないかと思っていたのですが、シカ肉を仕入れている猟友会の会長から、高齢化が深刻で平均 70 歳を超えていると聞きました。「俺らは 5 年したら山には入れないから、跡を継げ」と言われ、免許を取って狩猟や解体も教わるようになりました。年々被害が増えて人の生活が脅かされるくらいシカの害は全国的に深刻ですので、若い人にも興味を持ってもらって狩猟が身近になればいいなと思っています。免許を取って、解体施設も設計中で、あとは予算をどうしようかという段階です。

牡鹿半島は戦後植えられた木が二束三文で放置林となり、荒れた杉山によって土砂災害も起きています。うちも津波は助かったのですが、その年の秋の台風で山が崩れたため隣の家が潰れて、カフェの中まで土砂が入ってきました。これでは安心して暮らせないですし、カキの養殖は山が豊かでない海がよくなるので、手入れが必要です。森林組合にお願いするとほとんど利益がでないので、自伐で木を切り、家具へ加工し付加価値をつけて販売しています。

6 次化で収益を生みながら環境を守っていけるモデルができれば、タイルや大漁旗など地元の作家さんとコラボしたり、東京・中野の魚谷屋にもテーブルを納品させてもらっています。

漁師も、加工販売までやるのは大変なのでわれわれがお手伝いをして、出店や、ツアーを組んでお客さんと呼んだり、ヤフーさんと連携して直販の仕組みをつくったりもしています。私も漁業権を持って、今度船が来るので、自分も漁師として関わっていききたいと思っています。

石巻には料理人の方や地方を何とかしたいという方が多く来られますので、研修的な宿泊場所としてここを活用できないかと。半径 100m ぐらいでサスティナビリティを学べる場所としてできたらいいなと思っています。

もともと教員でしたので、学生との連携をやりたいと思って様々な取り組みをしてきました。水産高校のマリンスポーツの授業や、漆塗りを専攻している工芸の学生の卒業制作、建築の学生もここを学びの場としていて明治大の学生は半年間住み込みで、ここを卒業設計をやっていました。この魅力を伝える広報誌の作成も、学生にやってもらっています。お互いにウィンウィンになる取り組みが大切だと思います。

ハーバードビジネススクールも 2 年間受入をさせていただいて、本が出ました。東北に実践的に学びに来るプログラムがあって、ハーバードから 2 回も。普通のビジネスのロジックでは、ここは到底理解できないことばかりです。立地でも無理です。住民の反対で事業をやめた例では「それは何人の反対があったのか?」、「2 人です」と。「2 人の反対で君たちはビジネスプランを変えるのか」というように。地域でそこはすごく大事で、という話を一緒に勉強させてもらっています。今、東北で活動している人たちは、想いをビジネスにしていくことをやっています。普通は無理そうなことにチャレンジしていて少しずつ形になってきています。利益最優先になりすぎて、息苦しい世の中になっているので、自分と相手だけではなく、地域もよくなるビジネス展開をしていきたいと思っています。

私の同世代は、進学校へ行って大手に勤めて、そうしたら幸せというルールに乗っかって、出てってしまったのですが、本当の豊かさとは何だろうと。確かなものもない時代に、もっと選択肢があると、自分らしく生きられるのではないかと。ローカルベンチャーと呼ばれるところに就職したり、起業したりしていくのも一つの選択肢としていいのではないかと。

今は 8 名とアルバイトで 10 名ちょっと超えますが、みな異端者です。前職が全然違って、カフェで働いたことのあるスタッフはほとんどいないのです。最初はボランティアからのメンバーで雇用を作って、仕事が生まれて U ターン組が戻ってきて、根付くようになりました。それを見てまた I ターンが入って。関わってくれた人が 2 人独立していますし、今年また 2 人、カフェをオープンする予定です。

す。ここを出たメンバーがまた興ず流れができてきています。

今、蛤浜には家がなくて住めないのですが、みんなで消防団に入ったり、草刈りしたり、住民だけではできないところをスタッフで支えています。これからは人で仕事をつくっていかうと思っています。自分たちで実現したいもの、ありたい姿をチームでつくっていかうと思います。

7年が経過し震災モードはだいぶ薄れて、魅力ある仕事や暮らしがないとこれから人は来ないと思うのです。交流人口だけの限界も感じています。これからは関係人口とか、もっとコミットしてもらう人を増やしていきたいと思っています。

課題もあります。交流人口もある程度超えると、地元のストレスになって、せっかくあった静かなよさとかが壊れていくのです。それと事業性を両方やらなければいけないので難しいのですが、模索しているところです。

5年になりまして、次のビジョンを描き直さなければならぬ段階に来ています。やはり人と自然の循環をつくって、地域の豊かな暮らしを未来につなぐことをミッションにしていけたらと。森と里と海が循環し、それぞれのビジネスとしてちゃんと小さくても回して。小さいタイニーハウスのようなものをつくって、2拠点や多拠点居住ができればいいなど。各地で移住者の奪い合いになっていますので、みんながそれぞれ回ってどの地域も残る仕組みができればいいと思っています。定住しなくていいですと。6次化だけでは限界があるので、農工商連携や流通の人と組んで、都市との交流も盛んにしていきたいと思っています。

これからはさらにクリエイティブな浜にしていきたい。創造的限界集落という言葉も考えたのです。限界集落という悲壮感が漂うのですが、クリエイティブにすることで楽しくやっていけないかと。昔の人の知恵や技を受け継ぎながら、時代に合わせた形をつくって、自然と共生して豊かな生態系をつくっていかうと思っています。そのためには場づくりともづくりと人づくりではないかと。カフェもそういう場です。チャレンジする人を増やし、この資源を使っていろいろなものをつくって。いままでは地域課題があって、事業をつくって人を集めたのですが、結構苦しくなって。縛られて、みんなのモチベーションが上がらなかつたりもするので。逆に人から事業をつくって、結果的に地域課題の解決ができればいいのでは。楽しくやるということがすごく大事で。

今後、ここを学びの場にしていきたいと思っています。ターゲットは地方をよりよく変えていける価値を生み出せる人を増やしていきたいなど。何の価値もなくなったと言われる地域資源を何か事業にしていこうな人をどんどん増やしていかう。一人親方のような人をいっぱい増やしたら面白いのではないかと。ここでやる人を増やそうと思ったのですが、ほかの地域でやりたい人も1回ここで学んでいただいて、また自分の地域に戻ってやるような。宮城県丸森町の地域おこし協力隊の方が3カ月、研修に来ることになっていてメンターを仰せつかりました。協力隊で入ってもうまくいなくて辞める人も多いのですが、うちで地域との関係性や、小さく回すことを学んでいただいて。蛤浜という限界集落ですが、外に開くことで人の流れが常にあるような場所にできればいいかなと思っています。

—この浜の防潮堤の話はいま、どんな感じですか。

住民全員が反対しているのですが、ゴリ押しでやると。T P6mで3mぐらいの壁ができるので「やめてくれ」と言っていますが。地盤沈下でいま、越波がひどくて、しけると10mぐらい波が上がって、道路もかぶるのです。その工事を早くやってくれと。地盤沈下した分1m戻す工事はできるそうなので、とりあえず1m高くして、波返しを付ける防潮堤を整備すると。そうするとT P6mは10年ぐらい先ということらしいのですが、ぜひ、それでという感じです。予算がなくなって終わればいいと思っています。防潮堤全部反対というわけではなくて、必要な高さはあるのですが、急によく分からないデータでバカンとなって。そんなに高いのはいらぬという感じです。できたところは絶望していますね。「こんなものができると思わなかった」と。

—この景観を失ってしまうのはあまりにももったいないかな。

この後ろに家が建てられるのなら、防潮堤をつくる理由はまだ分かるのですが。つくっても家を建てては駄目という制限がかかると矛盾しているのです。何も守るものがないのに何億もかけて無駄な

税金が投入されることも、どうなのかなと。これから低平地の利活用問題が出てくるのです。防潮堤をつくったけれど、家を建てられないので、では、どうするのですかという。住居でなければ建てていいということなので、どんどん借りて使ったりしたいと。地権者の方も離れて7年になり、最初はすごく執着があったのですが、「もう、いいよ」、「お前たちに譲るから」という感じになってきて。うちのスタッフも5年、6年一緒にやってくれているので、信頼関係もできてきて、ちょっとずつ土地を買っていきこうと。山も、息子さん、娘さんの代は興味のない人が多いのでわれわれに譲ってもらっていきこうかなと思っているのですが。

―漁業や林業、シカといった日本が抱えている問題だらけ、セットで揃っているようなところで、関心ある人が来てほしいという感じでしょうか。

この辺は一次産業の問題が集約されているのですが、それ以外のものもどんどんきてほしいと思っています。石巻専修大学の学生が「どうしてもインターンをさせてください」と夏に来てくれて。キノコマニアなのですが、われわれよりはるかに知識が豊富なのです。将来山を貸すから、何か栽培をしたら、と。また一つ、小さくても産業が生まれたり、山林の利活用ができたり、その人の興味が活かせるのであれば、そういう人を引っ張っていきこうと思っています。

―解体している写真があったし、漁業権は自分で持って、ちゃんとやっている姿が来た人に見られるというのはすごい。

一次産業の現場を見たことのない人がほとんどではないですか。狩猟も、猟友会が獲っていてもわれわれも知らないです、この距離でも。そこを見ていくと、いろいろまた考えさせられていくので。オープンにしていくのはすごく大事だと思っています。

ビジネスもしたことがなかったですし、やったことのない業種ばかりなのですが、困るといろいろ見に行ったり、聞きに行ったりしたのです。そうすると不安が1個ずつ取り除かれていくというか、「こういうふうやって、こういうところに気をつければできるのだ」と知ると、できそうな気になってくるのです。それが大事かなと思っています。

「ここは何が魅力ですか」と聞かれます。きれいな場所って、日本中いっぱいあるのですが、箱庭的なコンパクトさかな。本当に全部手が届くというか。30年ここで活動できたら、山も復活させられるのではないかという規模感なのです。大きすぎると、無理となるのですが。手を入れていったら理想が30年後に出来あがるのではないかという思いはあります。

―集う人の輪が多いですが、心がけてきたことはありますか。

最初から心がけたのは楽しむことです。最初は皆さん、大変だから助けになればと来てくださって、それだけでこちらはよかったと思うのですが、私は運営を始めるときから、この浜の魅力や、来てもらった人みんなに感じて帰ってもらいたいということがありました。泥かきは午前中でやめて、お昼はバーベキューをして、午後から瓦礫だらけの海で泳いだのです。不謹慎と怒られることもあるのですが、結局が楽しくて、また人が人を呼んでくれて、「あそこ、面白いから行こうぜ」と人が増えていったのです。思いが強すぎたり、立派すぎたりすると、みんなしんどくなってしまって、ちょっと近寄りたくなる。あとは持続できないのです。最初は地元のためにと、みんな、前の職も投げうってギリギリでやってくれるのですが、地元のためにとやり続けて反発をくらったときに、「何のためにやってきたのだ」となります。一步退いて考えたら、よけいなお世話だったりもするのです。自分たちのひとりよがりになっていた部分もあったのかなと思って。だったら、それぞれのスタンスを尊重して、自分たちで楽しいことをやっていきこうと思って。そこに徹して。出会った方とのつながりを大事に。

―確かな収入がある教員を辞めるということは退路を断ったという見方もできるかもしれませんが、決断について聞かせてください。

退路を断って自分を追い込んだというのもあるのですが、中途半端な気持ちではできないことですよ。教員は教員で、すごくやりがいがあったのですが、やはり大変な仕事なので。それをやりながら、ということは絶対に無理だと思って。あとは、一緒にやってくれる仲間が真剣に、縁もゆかりも

ない土地で、貯金を切り崩してやってくれた姿とか、自分の生活を守りながら中途半端なチャレンジでは、絶対にうまくいかないですし、誰も一緒にやってくれないなど。常に思っているのは、自分でやってみることを大事にして自分も一緒にやっていく。口だけの人間にはなりたくないところがあって。本当はプレイヤーになりたいのですが。誰かこういう役割をやってくれたらいいなと思いつながら。

最終的には、ここに昔みたいな温かいコミュニティができて、魚を捕って暮らせたら、それでいいのです。そのコミュニティをつくったり、自然環境を再生するためにいろいろな人を巻き込んで、しっかりつくらなければいけないということが第一段階です。それができているのだったら、ただ魚を釣って暮らしたいという思いはあります。

—幼少の頃から、この浜の悪いイメージはなくて、やることができた。

本当に近所の人にもかわいがってもらいましたし、結婚して戻ってきたときもすごくよくしてもらって。いいことしかないですね。

誰に頼まれたわけでもないのです、ここをやっているのは、自分が好きだというだけです。関わってくれる人も、変に理屈を付けて一緒にやってもらうのではなくてこの場所が好きでいてくれたらいいなという。そうしたらやりがいがあるのではないかと、シンプルにやっていきたいという思いはあります。

どうしても理屈で考えすぎてしまうこともあるのです、自分も。「社会的にはこうだから」みたいな。それよりも、純粹にここに人々やこの場所が好きだという思いが、越えていくのではないかと思います。

—楽しいと思っているところに人が来る部分と、課題にチャレンジする場所でもあるという、両方から入ってくる人がいるのかなと思ったのですが。

どちらからのアプローチでもいいと思っっているのです。社会課題を何とかしたいという人もそうですし、自分は好きなので、という、どっちにも玄関を開いておくような。結果的に残ってくれればうれしいですし、残らなくても、何年間か一緒にやってくれることで次につながっていくので。常に人が関わり続けるということをつくるのが大事なのではないかと。

時代の変化がものすごく早いので、柔軟な発想を持った人たちがいることが大事だと思うのです。カフェもはっきり言って手段の一つでカフェでなくてもいいのです。カフェの限界も感じてはいるので。回りの状況とか、時代に合わせて、次々変えていくような。

—助成金は取っていないのですか。

助成金は、今年で県の助成金を3年いただくことができました。カフェは自前で2年ぐらい、自走しています。3年目から県の助成金をいただいて、山やシカは全然お金にならないので、ソフト面の人件費を出していただいたのです。何とかみんなが食いつないで。来年は自分のいろいろなマネジメントの部分だけを助成金でいただいて、残りのスタッフ分はもらわないでいこうと。独立していこうという話になっています。だいぶ光が見えてきたので。

—地域おこし協力隊や地域貢献の助成金は…。

できればそれも越えていきたいと思っています。シカの事業は地球環境基金の助成を別にもらって、3年の事業で、来年2年目になるのですが、もう2年ぐらいいただいて回そうかなと思っています。できればそれもない状態でビジネスモデルに乗せたいのです。協力隊も3年なので、3年で自立して回せるモデルをいっぱいつくっていったら、ほかの地域でも参考になると思うのです。まず、1人でも食えることがすごく大事だと思っています。

—全国を視察される中でほかの被災地に足を運んだり。

お役に立ちたいという気持ちはすごくあるのですが。うちのスタッフは重機をやるのがいるので、震災直後の1週間ぐらいやったのです。私が行っても役に立たないので。自分の出番はもうちょっと

あとだろうなど。私が始めたのも、震災から1年経ってからなので。そのときに自分の出番が来るのではないかと思って。それまでこっちで頑張ろうと思っています。本当は熊本に行きたいのですが。

—カフェに来る客層も当初の復興支援者からだいぶ変わったのでしょうか。ただ素敵なカフェに来るという目的で。カップルも目立ちますね。

「え？ここ、震災に遭ったのですか」という感じで来られる方がだいぶ増えてきました。

—あまりにも空間のクオリティが高いと思って。東京でもそんなにない、おしゃれな空間ですね。ただのボランティアで、これはできない…。

日々、雑誌を読んでいます。震災前から好きだったので。最初の出会いが大きくて。工房で作業をしている島田という、種子島から来たメンバーはクレーンのオペレーターなのですが、DIYも好きで、独学で、グーグル先生とかで調べながらやり方を習得して。ニュアンスで「この辺をシュツとした感じ」とか、「パツとした感じでよろしく」と言うと、やってくれるのです。写真や雑誌を並べて「これ、格好いいよね」と日々話をしていて。

自伐で、倒しておいた木を、企業のCSRの人や学生ボランティアと一緒に搬出するのです。地元で製材してもらって、自分たちのトラックで積んでいって。木を伐るところから一緒にやりましょうということを展開したいと思っていて。自分が運んだ木材が自分のオフィスのテーブルになったりとか。できれば植林も来てほしいのです、そのあとに。

—地域でのトラブルはどんな経緯で起きてしまったのですか。

次の災害でも参考にしていただきたいのですが。自分が絵を描いていたことによって、一緒にやりたいという人が集中したのです。地元の人是最初「もういいから、好きに使っていいから」と。説明会とか何回もしたのですが、集まるのも大変だし、「土地はいいから、好きに使っていいから」という感じで。ボランティアに來たい人のために仕事をどんどんつくったのです。「じゃあ、ここの木も伐ってしましましょう」とバンバンやっていったら、「こうなるとは思わなかった」みたいな。「いいから」とは言いながらも、「ここはこうなります」や「こうしていきます」という丁寧な説明がだんだん抜けてきたこと、どんどん来てしまって、地元の人に説明する時間も持てなかったのです。「明日来ます」という方もいましたし。

体を動かす作業をしたいとなってくるのです。「いま、そんなにないのですけれど」、「でも何とかやらせてほしい」となって、仕事をつくり始めるのです、今度は。やらなくてもいいこととか。そうすると、地元の人から「よけいなことをするなよ」と。われわれも描いてなかったことを無理やりつくったりして。

最初は非日常だったのでいろいろな人が入ってきてよかったのですが、だんだん日常が戻ってくるとストレスになってくるのです。近隣の集落はキーパーソンがいないので支援が退いたあと、うちだけ、ガンガン人が来るわけです。そうすると回りの集落から、ねたみ、やっかみのようなものが、自分にはなくて、区長さんや地元の人に「いいなあ、お前のところはいつも」みたいな。それも、いい思いをしないわけです。

人の土地に手を入れる難しさも感じましたし。よけいなことはあまりしないで、「土地を使っていよいよ」と言われても、あまりそこには手を入れないようにしました。やはりイメージが違いすぎるのですね。自分らは「こうなる」と思いを描いていても、年配の人は思わなかったという乖離があるので。

—災害危険区域のあの空間をどう使うか、考えていらっしゃることは？

区長さんとも話し合っていて。一応、1カ所は芝生にして東屋ができるのですが、まずは公園的な使い方をされていて、完全に世代が入れ替わるぐらいに建てていくのだったら、何かやろうかなというような。

危険区域に家は建てられないのですが、別に行政が責任を負うことはないのです。それでもいいという人は、念書を取っておいて「次に災害があっても行政に文句を言いません」としておけばいいのではないかと思うのです。防潮堤をつくった危険区域に家を建ててしまうと、高台に移った人はどうだ

という不満が出てくるのです。だから行政はOKしていないと思うのですが。工事が終わって落ち着くと、残った人たちは「このままではやばいよね」となってくると思うのです。そうしたら、危険区域を解除していかうかというタイミングは、5年後ぐらいに来るのではないのでしょうか、忘れた頃に。OKを出してしまうと、譲った人は「家を壊したのに」と不平不満が出るので、多分、解除しないと思うのですが。

一住みたい人が出てくれば。

うちの7人はみんな「家があるのだったら住みたい」と言うのです。牡鹿半島の家を探したのですが、結局なかったの。住みたい人のリストを用意しておけば、行政に対して説得力もありますし。妥協案として、タイニーハウスのような小さい、3坪未満だと建築確認もいらないので、山の中に建ててセカンドハウスの。共有の集会所はいま、稼働してなくて維持管理が難しいですが、共通の炊事場をつくって回りにタイニーハウスを点在させようと思っているのです。町中に住みながら。外にもオープンにして、山のオーナーになってもらって、お金をいただいて「タイニーハウスを建てておきますので、いつでも使ってください」という展開をしても面白いかなと思っているのです。

一住むことが絶対ではないという…。

われわれも町中に住んでいて、行ったり来たりもいいかなと思っているのです。30分圏内なので、夜は町中でいろいろな仲間と飲んで情報交換できるし。東京から定期的に通ってくる人もいます。拠点を全国に2、3持っておいて人が行き来するようになれば。人口が減っていく中でただ移住者の奪い合いだと、どこかは衰退するわけです。そうではなくて、みんながいい感じの方法がないかなと。最悪、ここは住む場所でなくてもいいかなと思っているのです。外に開いて行き来する場所の位置付けでもいいと思っています。

一先生を辞めて一步踏み出すまでの一番大きなきっかけは。

同時に重なったのです、タイミングが。自分にやれという指令が下りているのかなと思って。女房や、震災前に亡くなった母親が生きていたら絶対にできないということはあります。いい仲間と出会えたことが何よりです。震災から2年目、生徒を連れてアメリカに行って。みんな瓦礫を撤去してくれているのですが、私は1カ月アメリカへ。アメリカで、裸一貫で渡って起業して成功した人たちがお金を呼んでくれたのです。アメリカで話をしたら、「絶対いけるよ、絶対にやったほうがいいよ」と言われて、感化されて。

教頭や校長もすごく心配してくれて「いつでも戻ってきていいよ」と、だから「休職にしろ」と言われたのです。ありがたいですが、甘えが出ると思って退職しよう。生徒にも「やるときにはやらなければ駄目なのだ」という話をいつもしていたので、自分がビビって中途半端にやったら格好悪いかなと思いつつながら。親父や義理の親父も、最初の開業資金とか応援してくれて。自分の貯金と、親父たちの資金を合せてやったのです。

一災害に限らず、いろいろな場面で亀山さんのような人がいたら、世の中は変わっていくと思うのですが。

私が始めたときは全然なかったのですが、起業家支援の仕組みが増えてきていいと思っているのです。最初は、ETIC(社会起業支援NPO法人)さんが右腕派遣として2年間、お金をしてくれました。それで災害復旧もできたので。貯金が底をついて「どうする?」となったとき、ETICさんが、企業の寄附金で支援してくださったので。「えい!」とできましたね。半分やけくそですが、平時では思い切ってはできないですね。ある程度の保証がないと。伴走するメンターや、いろいろな事例を学ぶ機会が大事です。地方でのソーシャルビジネスが、この5年ぐらいで広まってきたので、ケーススタディをやったらいいと思っています。

私も、最初は個人的に行ったのですが、そのあとはETICさんの支援で、ローカルベンチャーを先駆けてやっている人のところに3回ぐらい行かせてもらってます。既存のビジネスで成功している人とは違う、ローカルで本当に戦って、やってきた人の伴走が大事です。自分も自立していきながら

新しくチャレンジする人の伴走ができる役割を担えたらいいと思っています。

—クラウドファンディングはされたのですか。

海の小屋を建てるときにちょっとやりました。思った通りには集まらなかったですけど。銀行のアプローチもあって、いままでは絶対融資しなかったようなことを「一緒にやりましょう」と言ってくれています。

—一回していくことまで、すごくヒントをいただきました。

都市だとこのモデルは使えないですが、田舎は貨幣経済だけでなく、物々交換や貸借経済のようなところがあります。島田はこの間、不動産屋さんから「人に貸せないから、面白いことをやるのだったら」と家をもらいました。「おしかりンク」という法人の代表も「有効的に使ってもらえるのなら」と2戸家ももらって。食べるものはもらえるし死なないことが担保としてあります。漁村だと困ったら漁業を手伝いさえすればお金になるので。1カ月船に乗ったら50万ぐらいすぐ稼げるので。私も駄目だったら、2年ぐらい海外巻き網に乗れば2,000万ぐらい稼げるかなと。借金が返せる担保が。都市で貧困で困っている人はこっちに来ればいいのにと、いつも思っているのです。

—ここの生活を知っているからでしょうね。

それも伝えていかなければいけないのです。年収ベースで比較されると勝てないですし、年収いくらなら移住しますという話もあるのですが、貨幣に変えられない価値をどう可視化するかが大事だと思っています。都市なら、3,000万～5,000万する家がタダでもらえるので、その分年収が低くてもいいですよ。車ももったりしているのです。

震災のとき、ここのおじいさん、おばあさんは救助がなくても、竈でご飯を炊いて、沢水を沸かして風呂や水洗トイレをつくったのです。すごいなと思って、生きる力が。われわれにない、そういう力は絶対に受け継がないと駄目です。どんな状況でも生き延びられるスキルを身に付けようと思って。1回、家を建ててみよう。スキルを身に付けていけば、家が建って食料を確保すれば死なない、そこが最低ベースという話をしています。ただ自給自足に戻るのではなく、しっかり社会の中で稼ぐことを大事にしたい。両立できたら、地方にも可能性があるのではないかと思っているのです。ヒッピー的にこもって、やるのではなくて、社会にマッチするような仕組みをつくりたいのです。

(以上、所澤新一郎)

5. おわりに

5-1. 3団体インタビューの知見・論点

以上は、宮城県石巻市で3団体がそれぞれのスタンスでこの7年余、模索しながら走り続けてきた取り組みの一端である。さまざまな困難の中で続けてこられた活動、それを支えた情熱や思いに心から敬意を表し、あわせて、多忙な中でインタビューに長時間対応して下さったことにも感謝申し上げたい。

地元ではキーパーソンとして有名で、各種メディア等でも取り上げられることが多い方々だが、比較的紙幅に余裕があるこうした形で3団体の思いや取り組みを存分に紹介できるのは意義があると思われる。いずれも人間的な魅力があって周囲の笑顔が絶えない方たちだが、生活再建が厳しい住民に対する深い理解(人間そのものへ理解)、地域が抱える課題への深い洞察を

内包されていることはインタビューから垣間見える。だからこそ、活動を支える仲間の輪が広がり、地元で寄せられる信頼も厚い。

岩元暁子さんの「きずな新聞」はずっと愛読してきたが、受け手に手に取ってもらい、読んでもらうための工夫をあらためてうかがうことができた。「こんにちは〜きずな新聞です」。元気な声で仮設を一戸ずつ回る岩元さんの配達作業に同行したことがあるが、ボランティアも含めて真心を届ける「手紙」だからこそ、入居者は扉を開けるし、多くの人が全号保管もしているのだろう。

インタビューで「なるほど」と唸らされたのは、岩元さん自身が「皆さん、大丈夫ですか」と呼び掛けるようなタイプより、「私、頑張っているのですが、ダメなのですよ」と言って住民さんから励まされるようなキャラ」を心掛けているという点である。被災者支援の核心とも言うべき至言だ。

被災地では直後からさまざまな支援が入るが、多くは地元に対し「支援する」、「される」という固定的な関係にとどまる。仮設住宅からなかなか脱することができない入居者は、さらに「見守る」「見守られる」という行政・支援側との関係をなせば「強要、される。どうしたらこうした方々の力を引き出すことができるのか。その一つの解が岩元さんのような「キャラ設定」かもしれない。人は相手から心配されるより、相手を思いやり、心配する方が主体的な立ち位置になれる。電話したり、メールを送ったり、野菜を送ったり。誰かのために行動という次の段階に及ぶのだ。被災地で「孤独死対策」、「見守り」に日々専念する多くの方に、一步引いて考えてほしい視点である。「あなたの一生懸命さが、見守る・見守られるの固定的な関係をより強固にしていますか」と。

サードステージのお2人のインタビューも実に興味深い内容となった。

仮設住宅から出る見通しの立たない方は「情報弱者」の方も少なくない。市は広報や説明会で情報を伝えているつもりでも、これらの方々には届いていない。東日本大震災に限らず、各地の災害で感じることだが、難解な用語が飛び交う施策を翻訳して当事者に伝える作業が不可欠なのに、そうした機会や担える人が決定的に足りない。サードステージは隙間を埋めるような形で、メンバーがおなかを揺すりながら分かりやすく翻訳作業を続けている。

この自立支援事業では施策の伝達にとどまらず、周囲との人間関係構築などに難がある方が相当対象として存在している点も厳しさがある。そうした方々に向き合う際に、相手とのコミュニケーションを重ねる手間が欠かせない。杉浦達也さんが繰り返して語った「アンテナを張っている」姿勢が、いつか相手が扉を開けてくれることにつながるのだろう。震災前、杉浦さんが飲食業、新井英児さんが営業と、コミュニケーション力そのもので勝負する仕事に携わっていた経験は間違いなく現在にプラスになっている。ただ「見守る」、「見守られる」だけよりも、相

手と豊かな対話が生まれ、結果としてこれらの方々の「次へ進もう」という行動につながる余地があると感じた。

もう一つの主要事業の紹介で、牡鹿半島の総合商社的存在と前述したが、どんな場にもいる、どこからも声がかかる、といったマルチプレーヤーのような存在がどの地域にもいてほしいと感じた次第である。「やれることを」と2人で始めたごみ拾いが大規模な地域の取り組みに発展した事例にも引かれた。

亀山貴一さんが運営するカフェ「はまぐり堂」にこれまで多くの知人を案内したが、みな抜群の景観や素晴らしい内装、質の高いメニューに圧倒される。オープン直後は復興関係者が多かった客層が、震災とは関係なくカップルやグループが訪れる場に変貌したのもうれしい限りである。一方で、新しい展開を踏まえて集う人の輪がさらに広がっていることも驚嘆する。

インタビューでは亀山さんの「結果的にオーライのことばかりなんですけど」という言葉が印象に残った。当初の「不便なアクセス、この立地では無理」という金融機関とのやりとり、ことごとくはじかれたという助成金…。何も無い中で手探りで始め、亀山さんの思いに共感した仲間の輪だけが頼りという展開が結果的に実りつつある。当初から潤沢な資金や豊富な支援が入っていたら、さまざまな得意技を持った仲間、とにかく亀山さんを応援したい仲間が入る余地はなかったかもしれない。大きな災害があると巨額の助成金や外部の支援が動くが、学んでおきたい事例である。立地は問題ではない、本物、ストーリーに触れたい人は訪ねてくるという点も証明されてしまったようだ。

林業や水産、シカの食害、過疎といった全国でも普遍的に抱える難問に向き合っている亀山さんだが、インタビューでは生まれ育った蛤浜への愛着も存分に語っていただいた。「ここが好きなんです」。ただ「課題解決」を掲げただけではこれほど仲間は駆けつけなかったかもしれない。「ワクワクする場」、「何か楽しそうな場」だからこそ。輪の広がりを今後も楽しみにしている。

(以上、所澤新一郎)

5-2. 首都直下地震後の復興まちづくりへの示唆

本研究と並行して進められた2015年から2017年に実施された社研グループ研究助成A「東京都心商業集積部の空間情報環境と災害対応に関する社会調査」(代表：佐藤慶一)では、原宿表参道地区を対象に、まちづくりをテーマにしたワークショップ(佐藤2016)、ステークホルダーを集めた防災ワークショップと外国人観光客向けの防災マップの制作支援(佐藤・大矢根・吉井2017)やVRの制作と防災訓練(SHIBUYA BOSAI FES2017³)での展示、避難後の仮設住宅の需給デ

³ 渋谷区のホームページ <http://shibuya-bosai.tokyo> (最終閲覧日：2018年5月27日)。制作したVRについてWEB記事 (<http://magazinesummit.jp/life/158910117110>、最終閲覧日：2018年5月27日) が作成公開

ータの整理(佐藤 2017)、時限的市街地などをテーマにしたシンポジウムの開催⁴などを行ってきた。

この3年間の研究活動を通じて、避難期から応急居住期、さらに復興まちづくりへと視野が広がる中で、2017年度グループ研究B「復興ステークホルダーの探索的再構築に関する研究実践」(代表：飯考行)にも参加する機会を得て、石巻の震災復興の現場に対峙する様々な人々の取り組みに触れたことで、都市再開発事業や土地区画整理事業といった復興都市計画事業という従来の固定的「復興」のイメージから離れ、個々人の生活へ具体的なイメージを膨らませることができた。

例えば、石巻復興きずな新聞舎の岩元氏からの「復興住宅に移るのはゴールではない」、「お茶会などのイベントに)来ない人が心配」といった発言や、復旧・復興期の住民の情報ニーズの具体的内容をうかがった。復興公営住宅へ移ることで住まいの再建は完了したと思われるところであるが、その先では物理的にも人間関係も遮断され、隣に誰が住んでいるのかわからない、仮設住宅のようにイベントもないし、ボランティアも来ない、というような実態があるそうだ。石巻復興きずな新聞舎では、仮設住宅のみならず復興公営住宅へも手づくりの新聞を手渡しして周り、スタッフと住民に自然とコミュニケーションが生まれている。手作りの新聞を渡すというスムーズな形で、結果として戸別訪問となっており、「お茶会などのイベントに)来ない人」へもリーチが伸びている。そして、ご近所さんに話せないこと、行政への不満など多様な語り引き出されている。記事は、医療健康系、まちなかの情報、防災・減災、市民やスタッフのエッセイと多岐にわたっているが、首都圏被災時に多様な情報が希求されるであろうことを想起した。

サードステージの杉浦氏、新井氏は、石巻市の「仮設住宅被災者自立生活支援事業」を受託して、仮設住宅で暮らしている住民へ、恒久的な住まいへの移転に向けて、制度の情報提供や相談、手続きなどの協力や支援を行っている。賃貸住宅空き家を借上げて仮設住宅として利用している約200世帯も担当しているそうだが、プレハブ仮設と異なり、1軒1軒場所が異なるため、地図で調べながら探し回ることの苦勞を語られている。想定首都直下地震後も膨大な賃貸住宅空き家が借上仮設住宅として利用される見込みである。佐藤(2017)では、災害前に居住す

されている。

⁴ 2018年2月14日(水)18時半～21時(日本看護協会ビル・JNAホール)に開催。プログラムは、1. はじめに 山本好(災害復興まちづくり支援機構) 2. 話題提供 ①帰宅困難者対策と仮設住宅計画 國副隆(渋谷区役所) ②東京での仮住まいの不足 佐藤慶一(専修大学准教授) ③被災地での仮設住宅建設 原野泰典(坂茂建築設計) ④仮設住宅のコミュニティデザイン 小泉秀樹(東京大学教授) 3. リレートーク&ディスカッション 4. 閉会挨拶 大矢根淳(専修大学)であった。専修大学HPの紹介記事(<https://www.senshu-u.ac.jp/news/20180216-03.html>)が、本稿執筆時点(2018年5月27日)で閲覧可能である。

る自治体から大きく離れて広域化する可能性を指摘している。広域にわたる膨大な借上仮設への入居者に対して、石巻で見られるような見回り支援が可能であるのか懸念される。国の「被災者の住まいの確保に係る論点整理(抜粋)」⁵では、支援について、「平常時における福祉の体制を活用した、応急仮設住宅に入居した被災者の見守りの実施」、「要配慮者世帯に対する各種情報提供、適切な再建方法や移転先に係る個別の相談対応の充実」等を挙げている。また、広域避難対策として「被災者に係る情報連携を円滑に行うためのマイナンバー制度の利活用などの仕組みづくりの検討」、「SNS 等も活用した、広域避難している被災者への適切かつ的確な情報提供の実施」、「相談窓口の設置」等を挙げており、対応の方向性が整理されている。石巻の2事例からは、SNS や相談窓口を設けて待っているだけでは「来ない人」(あるいは「来られない人」)が出てくるので、より多くの人へ情報を届けにいき、細やかなコミュニケーションから個々のニーズを引き出していくような積極的なサポートの必要性が浮かび上がってくる。

サードステージは、2017年夏に開催された ap bank による Reborn-Art Festival⁶に、地元団体として協力していた。「石巻中心市街地と牡鹿半島にて、国内外の現代アーティストたちの作り上げた作品が地元の方々の協力のもと展示され、さまざまなスタイルの音楽イベントが開催され、さらには、石巻を含む東北のシェフのみならず、国内外の有名シェフたちによる地元の食材を使ったここでしか味わえない食事を」というクリエイティブなコンセプトと、地元との温度差を感じ、地域のキーマンをたずね調整をしたり、チラシやポスターを1軒1軒訪問して地元への告知をしたりするなどしていた。

はまのねの亀山氏は、震災前9世帯、震災後3世帯となった限界集落の自宅を改装し、洗練されたカフェにして、ツリーハウスや自然学校、森や海での結婚式から研修や学びの場づくりといった人が集まる仕掛けを次々に展開して、交流人口1万5千人/年を成し遂げた元高校教師の起業家である。今後の展開についても多拠点居住のためのタイニーハウスの建設などユニークなアイデアを構想している。その根底に、「限界集落というと悲壮感が漂う」が、それを「クリエイティブに楽しくやっていく」という考え方があることを語ってくれた。

Reborn-Art Festival や「はまのね」の取り組みをうかがいながら、東京渋谷でダイバーシティなまちづくりを進めるピープルデザイン研究所のコンセプトである「超福祉」(須藤 2014)との共通性を感じた。「超福祉」は「ゼロ以下のマイナスである『かわいそうな人たち』をゼロに引き上げようとする」のではなく、「思わずカッコイイ、カワイイと使ってみたくなるデザイン」、「イノベーションを期待させてくれるテクノロジー」といった方法で、「障害者をはじめとするマイ

⁵ 内閣府 HP (http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hisaishasumai/pdf/ronten_gaiyou.pdf、最終閲覧日：2018年5月27日)より。

⁶ <http://www.reborn-art-fes.jp> (最終閲覧日：2018年5月27日)

ノリティや福祉そのものに対する『心のバリア』を取り除こう」とするものである。被災や限界集落といったマイナスを、クリエイティブにプラスに転換していく、アートやデザイン、そしてビジネスが、復旧復興過程における現場の知恵や工夫として蓄積されはじめている。

東京の「事前復興」研究を進める上で、地域や災害の特性が異なっても、直近の東日本大震災からの復旧・復興プロセスにおける様々な苦労や試行錯誤から学ぶことは、具体的なイメージをもたらしてくれるものであり、必要不可欠な作業であることを痛感した。2018年度からは、東北被災地の復興プロセス研究と東京の事前復興研究を融合させた社研グループ研究助成 A「減災サイクルのステークホルダーと事前復興への取り組みの実相」(代表：大矢根淳)が始動する。被災地の知恵や工夫を紐解きながら、これまで手探りにより形作ってきた東京の事前復興研究のブレークスルーを目指していきたい。

(以上、佐藤慶一)

参考文献

- ◇池上正樹著，2013，『東日本大震災石巻の人たちの50日間』ポプラ社
- ◇いしのまき浜日和製作委員会編著，2013，『いしのまき浜日和』ISHINOMAKI 2.0
- ◇松永桂子他編著，2016，『田園回帰⑤ローカルに生きるソーシャルに働く』農文協
- ◇小田切徳美他編著，2015，『地域おこし協力隊 日本を元気にする60人の挑戦』学芸出版社
- ◇大矢根淳，2012，「被災へのまなざしの叢生過程をめぐって—東日本大震災に対峙する被災地復興研究の一端—」『環境社会学研究』第18号，pp. 96-111
- ◇大矢根淳，2014，「東日本大震災・現地調査の軌跡Ⅲ—生活再建・コミュニティ再興の災害社会学の研究実践に向けて(覚書)—」『専修人間科学論集 社会学篇』Vol.4, No.2, pp.149-162
- ◇大矢根淳，2015，「津浪(波)避災の諸相—被災地での踏査・聞き書きの研究実践から—」『専修大学社会科学研究所月報』No.618・619(合併号)
- ◇大矢根淳，2015，「第2章 現場で組み上げられる再生のガバナンス—既定復興を乗り越える実践例から—」，「第8章 小さな浜のレジリエンス—東日本大震災・牡鹿半島小湊浜の経験から—」，清水展他編著『新しい人間、新しい社会—復興の物語を再創造する—』(災害対応の地域研究5)，京都大学学術出版会
- ◇桜井政成編著，2013，『東日本大震災 NPO とボランティア』ミネルヴァ書房
- ◇佐藤慶一，2016，「共創型ワークショップを通じたアクティブ・ラーニングの試み」『専修大学教育開発支援委員会広報誌』No.32, pp.1-4
- ◇佐藤慶一・大矢根淳・吉井博明，2017，「都心商業集積地の防災課題の整理と対応策の具体化」(日本災害情報学会第19回学会大会)

- ◇佐藤慶一，2017，「想定首都直下地震後の応急居住広域化の可能性と政策的検討」『地域安全学会論文集』No.31，pp.155-166
- ◇須藤シンジ，2014，『意識をデザインする仕事「福祉の常識」を覆すピープルデザインが目指すもの』阪急コミュニケーションズ
- ◇所澤新一郎，2015，「被災地の多彩な力を支えよう」『Joint＝ジョイント』（特集，東日本大震災からの復興：地域の活動を支援するために），No.18，pp.8-11
- ◇東北復興新聞編，2014，『3 YEARS』A-Works
- ◇米田智彦著，2017，『いきたい場所で生きる』ディスカヴァー・トゥエンティワン
- ◇矢崎栄司編著，2012，『僕ら地域おこし協力隊』学芸出版社
- ◇「復興とは何かを考える委員会」(議事録)、
日本災害復興学会 HP 参照 (<http://f-gakkai.net/modules/tinyd2/index.php?id=1>)
- ◇『阪神・淡路大震災のとき現地で発行されていた生活情報誌 デイリーニューズ縮刷版』,1999,
あらばき協働印刷